破界僧～鬼滅の世紀～

ヤンヌルカナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本在住２０００年目に突入した”死ねない”男が知らず知らずの内に誰かの心を救う。

大正時代の日本。愛情深さと運の良さだけは人一倍の男が駆け巡り、回り回って鬼じゃ無くて悲劇を滅して命の代わりに心を奪っていく（無意識）お噺。

「平和は嵐の前の静かさに過ぎない。」

目次

嵐の前の静けさ
嵐の前の静けさ 1
二千年モノの亡霊 8
嫌戦軍人 14
暇乞いと限りなき螺旋 18
収支ニ怪シキ感有リ 26
確定無罪 29
坊主・ミーツ・坊主 36
帰宅 42
一緒 壱 53
一緒 弐 56
一緒 参 60
一緒 四 64
一緒 伍 70
家族 75
奏琴想詩 90

嵐の前の静けさ
嵐の前の静けさ

鬼滅の世紀

文明開花の余韻も流れ。
新たに花咲くデモクラシー。
モダンガールとモダンボーイが喫茶で逢引きハイカラさんね。
移ろう俗世よあな浮世。
老いも若いも晴々と帝国の空に掛かる雲は無し。

大正暮らし。
デモクラシー。
葉巻をふかすぞ成金が。
列車や船もが汽笛を蒸かす。
ぽっぽっぽっと白煙。

夜街賑やか人騒ぐ。
居酒屋、宴会、屋台に吉原。
飲めや歌えや我らは官軍。
大陸支那は腰抜けよ。
露西亜は子熊よ怖かない。
英吉利サンと亜米利加サン。
金を落とすぞ金の鳥。
仲良くしましょそうしましょ。
夜はふけるよソロソロと。

旭日の目覚めはまだ遠い。

「わははは！のぅ！我ら陸軍の敵は子熊の露西亜だ!!オマエもそう思わんか⁉？」

「は、はぁ。確かに同感であります。」

酒に呑まれた男が二人、夜の街を歩いていた。

片方は着崩した軍服の中年、もう片方はまだ糊が取れていない真新しい軍服の青年。

いつの時代もどんな職種も、酔った上司の介抱ほど残業手当を請求したくなる任務はない。

「うむ。そうであろう。私は近衛連隊から参謀の方へ入ったからな！間違いない！シベリヤに向けての気概が今の陸軍にはあるぞ！」

「しかし…〝あの方〟は余り賛成なさっておりませんでしたが…」

経歴を自慢する上官は東京上がりのエリートらしかった。

下士官であろう若い青年は、肩を貸すのに疲れたのかついつい口を滑らせた。

「なに⁉？…〝あの方だぁ⁉？」

「あっ…は、はい！」

下手を打ったようだ。

上官は唾を飛ばして軍帽を被り直すと小馬鹿にするような顔で酒飲み親父特有のニヤケを爆発させた。

「ふん！貴官。どうやらヤツのことをよく知らんようだな…。」

「い、いぃえ！幼い頃よりご活躍は耳にタコができるほど!!」

真面目な青年は律儀に応える。

「バカもん！そんな話じゃないわ！」

案外素直な上官も律儀に訂正する。

「あ、はぁ…。…その～、ヤツなどと呼ばれてよろしいのですか？」
半ば呆れがちに、呼称について指摘する青年。
「…ぷっ、ハハハハハっ！お前もか⁉？まぁ仕方あるまい！ヤツは尻拭いと悪運だけは恵まれておるからな！」
息が酒臭い。
周りには人通りが少ないとはいえ、実家が小さな集落上がりの素朴な青年からしたら周りの目が気になる。
やや赤面しながら青年はまた律儀に素直に声を上げる。
「…そ、それはあまりに不敬かとッ！それに、”あの方”は上官でありますよ！」
「くくくくっ！どうやら本当に知らんようだな！仕方ないから教えてやる！ヤツの階級は何かわかるか？」
ついに地雷を踏んだ青年。
親父特有の長話の沼に足を取られたようだ。
風が吹き先ほどまで雲に隠れていた月の頬がはみ出すと辺りを照らした。
「た、大佐であります！」
「あぁ。さっきも言ったようにアイツの活躍は昔から枚挙に暇無いだろう？なのにまだ大佐だ！ヤツの同期はみんな師団長閣下だってのにな！」
「で、では…何か問題を？」
「…ちょっとこっちこい！」
二人は灯りに映える街の通りから裏路地に入り、肩を寄せた。
肩を寄せた酒臭い男二人がコソコソと話す姿は滑稽である。
「はっ！…そ、それで…。」
「ヤツ、今の東京憲兵司令部の司令官様はな…これまでの戦役で陛下に頂いた御嘉賞が3回。その3回全部にこう返したそうだ。」
若い男の上官は、自分が若い頃に聞いた話を思い出しながら、当時の自分の上官がお冠になって話している情景そのままに演じてみせた。
ーーーーー

「ごかしょー？褒め言葉で戦争に勝てるのか⁉？腹が膨れるのか⁉？手紙なんて書く暇があるんだったら弾と美味い飯を送りやがれ！！」

ーーーーー

「ッ……ええ…。」

唖然。

国家元首からの感謝状など要らないから物資をくれ、そんなことは思っても言えることではない。

「な！そうなるだろう⁉？そりゃな！金鵄勲章も他の戦功賞も諸々与えられてんのに、戦役のたびに将官への昇級を逃しているわけだよ！」

「……何というか、凄まじい方なんですね。」

ヤツなどと呼んではいるものの、闊達な元上官の話ができて嬉しいのか気分は良さそうだ。

思い出し笑いでツボに入った上官は泣き笑いである。

対して若い士官はたじたじである。

「そうだろう！無礼千万極まりないんだが、今となっちゃヤツはいわば陸海関係なしに軍の最古参だからな、予備役にしようにも活躍しちゃうもんだから中々面倒なのさ。」

「しかし、では何故憲兵司令官に？」

「皮肉だろうな！あと、単純に勝手に動いてくれるからだろ。意外と前線主義なとこあるからな。」

「…勉強になりました。」

「わはははは！そうだろう！そうだろう！今の世の中は軍縮だと五月蠅いが、こうして料亭で舌鼓を打てるくらいには余裕がある。良い時代だぜ全く！…？」

すっかり与太話に変わりかけたところで、上官の動きが止まった。

見つめる先は一点。

「？いかがいたしましたか？…少佐？」

遅れて気づいた若い部下は上官の階級を呼ぶ。
返事がないのを怪訝に思っていると、上官の目がギラリと光った。

「…そこにおるのは誰かぁ!!」
先ほどまでピクリともしなかった少佐が突然声を上げた。
「⁉?……少佐、不審者ですか?」
実践経験のない若手には嫌なほどに緊迫が伝わった。
空には月がその全貌を覗かせていた。
「…いや、わからん。」
少佐の顔はいつになく張り詰めている。
腕時計は日の出から3時間前を指していた。
ーーーーーーー
ーーーーー
ーーー
ーー
ー
建物の暗影に入った不審な人影を追う。
先ほどまでの千鳥足は何だったのか、上官の中年の足取りは軽い。
青年が人影をある古い家の前に追い詰めた。
「そこの!そうだ!お前だ!襦袢を履いた黒ずくめのお前だ!お話を伺いｔ……」
青年は息を呑んだ。
空には抜き身の満月が光を放っている。
「どうしたぁ?…なるほど。……今の時間に出歩いとるの輩の服装にしちゃ些か物騒に過ぎるなぁ。」
遅れてきた上官は慣れた様子で周囲を確認すると、改めて不審な人影だった者に目を向ける。
「……ッ…。」
不審な人影だった者は手を動かそうとした。
「貴様!変な動きをすれば即刻逮捕する!手を頭の後ろに組んで跪け

！」
気を張るあまり声を荒げる青年。
青年は腰の拳銃に手を伸ばしている。
「まぁまぁ、そう声を荒げるな。…さて、話を聞かせてもらおうか？」
対して上官はいつの間にか着崩していた制服のボタンを首まで留め終えていた。
終始落ち着いた様子の上官、彼の両手は軍刀にも拳銃にも按じておらず、両脇にだらんと休められている。
帽子のつばの奥、目元の影から目の前の存在を品定めするように見る。

「腰にさした刀は何だね？」
上官は問う。
「武士にしては幼いな。だが、どうにも腰の物は玩具には見えんな。」
酒に呑まれていた時とは違う、以前の戦間期を生き延びた者特有のハリを声に纏っている。
「我々は憲兵ゆえ、本来ならこういうのは警官の仕事なんだがな…仕方ない。署まで御同行願おう。」
腕に巻かれた憲兵の腕章。
上官の中年はそれを指で示すと、部下の青年に声をかけてから月を背にその存在に近づいていった。

背後、月が陰る。

赤目は笑う。

怪奇の蠢く気配濃し。

ーーーーーー
ーーーーー
パーン！パーン！パーン！
ーーーー
ーー
ー

翌日。
平和な時代大正の大日本帝国に激震走る。

「陸軍憲兵二名惨殺事件」

本日未明、帝都近辺ノ繁華街ノ裏路地ニテ陸軍憲兵隊所属ノ憲兵二名ノ惨殺死体ガ発見サル。
殉職セル両名ハ其々ガ当日ハ非番ノ憲兵デアリシモ腕章ヲ着用シタ状態デ殺害サレテオリ、何レカノ事件ニ捲キ混マレタモノト考エラレル。
本案件ハ帝国政府ガ早期解決ヘノ努力ヲ惜シムコトナキコトヲ表明シテオリ、特殊案件トシテ捜査本部ヲ首都警察ニデハナク、殉職セル両名ガ所属セル部署ノ最上位組織タル東京憲兵司令部ニ置クコトヲ正式発表セリ。
捜査ノ統括指揮ハ同司令部ノ現司令官ガ担ワレルコトトナッタ。
我ガ帝国ノ誇ル日清日露戦役以来ノ英雄「崇坊　運（たかまち　さだめ）」憲兵大佐ナリ。

二千年モノの亡霊

二千年モノの亡霊

パタパタパタパタ
パタパタパタパタ
一定のリズムで刻まれる団扇の音
古男の嗜みが垣間見える古紙が張られた年代物だ。
今日も厄介払いで名ばかりの顕職に甘んじているこの男。
名を崇坊　運（たかまち　さだめ）。
約２，０００年前にここ日本列島に飛ばされて以来、久しぶりの平穏を満喫して間も無く長過ぎる待ち時間に欠伸が出ていた。
「２，０００年…確かに前回は時代が時代だったからハードだったけど、それにしても長いだろう。２，０００年以上色々過ごしてみて次のところに飛ばされる事もなく、かと言って酷い目に遭うこともなく、将又ぽっくり死んだり大病にもならない。一体全体何が何だか…。」
「今じゃぁ　崇坊　運　なんて名前で呼ばれて、肩張った軍服に、ピカピカの階級章で上等の椅子に沈んで腐る始末だ…。」

ーーーーー
この男、真名をば　極運坊崇勘　という。自称坊主である。
自身の出生を知らぬ彼は声のみの母から育てられたのちに凡ゆる世紀と時代、世界を半強制的に旅することとなった。
彼はその身に母（創造神と呼ばれる者と考えてよい）が下界に産み落とす際に願った”辛いことがないように”という願望から極めて運が良い。
しかし、結果的に彼はその願いのせいで死ぬことも２０歳以上に年老いることもできず、時空と時間に囚われることのない存在となってしまった。

しかし彼は其れらを操ることはできない。
何故なら彼は一つの役割を持たさられており、それはより多くの世界に幸せを広げることだからだ。
この世界での彼はこれまで既にいくつもの世界を完走し、運が良いだけの男ではなく百戦錬磨の漢として成長していたのだ。

…しかし、この世界ではどうやら未だ幸せを与えられずにおり、早くも2，000年以上の月日が経ってしまった様だ。

ーーーーー

ぎし

椅子に肩まで沈み込むと、大佐を示す金の三星が執務室の天井に吊し上げられた豪華な照明の光を反射したのか目にチカチカと不快が走った。
「ちっ…こんなモノ！東京の憲兵司令官だか何だか知らないが、ただでさえ暇なのに管理職と”馬”さえ奪われるとは！作戦課の坊主どもの方がマシだっての！」
コンコンコン!!
苛立ちからか腕を振り上げたところでドアがノックされた。
「…何だ！」
今は人を入れる気分じゃないと思いドア越しに聴いた。
「陸軍省の大谷中佐です！閣下!!本日の号外をご覧になられましたか!!」
「（何で省の者がここに？）読んどらん！入ってくれ！話を聞こう。」
「はっ！失礼します！」
ドアが空いてキビキビと入室してきたのはやはり若い士官だった。
（はぁ…最近は熱心な若い連中が多くて立派なこった。）
（…戦争なんぞするもんじゃない。）
「まぁ、かけろ。」
「ありがとうございます！」
手で椅子を示すとこれまた折り目の入った紙のように素早くスト

ンと収まった。
「ん。それで、号外とは何だ？うちの副官殿は何も言ってなかったぞ。」
憲兵が読まなきゃならん号外なんぞそうそう無い。
あ、俺の場合だが。
少しばかり体を固める様な動作のあと、大谷はゆっくりと話しだした。
「はっ！こちらが本日のちょうど1時間前…午後1時に刷られた号外です。」
「どれ…⁉？」
「はい。こちらに所属されていた高級将校一名、若手の士官一名が何者かによって惨殺されました。」
「…この文面を見るに、俺がこの仕事を任せられることは分かった。だが、そもそも警察がするもんじゃ無いのかね？あと、どうしてここで陸軍省が出てくるのかな？」
「……一部を省かせていただきますが、陸軍大臣閣下が仰るには、概ねこの案件は軍警察の治安維持能力への重大な挑戦行為であり、同時に憲兵の能力組織機能等の弛み、全憲兵の頂点でおられる東京憲兵本部司令官である貴方の監督不行き届き、そして……。」
「？…そして何だ？まだ大臣からのイチャモンが続くのか？遠慮はしなくて良いぞ、慣れてる。」
「いえ、そう言うわけでは。ただ…」
「だったらなんだ？…まぁゆっくりで良いぞ。俺はお宅らのお陰で暇だからな。ま、これからは忙しくなりそうだが。」
「…鬼、がですね。」
「鬼？角ぉ生えてるやつか？」
「…は、はい。」
「それがぁ、どうしたんだい？」
「食った、と。」
「？何を？」
「…申し訳ありません！これ以上は私にも何とも言い難く！何卒ご勘

弁を！」
「そ、そう言われたってなぁ。俺の仕事な訳だもんよ、何なんだ？そりゃ一体？」
「私も此方に出向く直前に見つけたのです！」
「出向く時って…何の経緯があって？」
「ッ全て！全て正直にお話しします。…本省は実は昨日中に既に遺体を収容していたのです。」
「…続けろ。」
「ゴクッ…収容した時間が日の出の約1時間前です。現場近くを通った吉原も近くその帰りだったものと思われますが、その通行人が鉄の様な匂いがした為近くの警官を呼び、二つのご遺体が発見されたそうです。」
「…それで。」
「はい。それで、発見当時の遺体の状況は損壊が酷く、特に若手の士官は上体の半分が損失していたとの報告があります。そして、警官一人の手では追えないと言うことで近辺一帯を管轄する警察署と消防署から応援が急行、簡易的な遺体の検死と身元の不明を行ったところ、検死は何かによって”齧り取られた”ような傷跡である、ということと服装からどちらも軍人であることが判明したとのことです。」
「…それが全貌か？」
「…その後が、問題です。ここからは表沙汰にできない情報でありますので口外は何卒慎まれるように。」
「わかった…。」
「…その後です。遺体は最初、近くの大病院へ収容されるはずだったのですが、途中で不可解なことが頻発したため移動できず、偶然近くの繁華街の料亭から出てきた本省の軍属に頼ったところ彼は省の上司に連絡、ここに来て我々が動くことになりました。」
「不可解なこと？」
「はい。「赤い眼が追ってくる。」と証言したそうです。」
「…そうか。それで、その後は？」
「はい。本省は憲兵二人の惨殺という爆弾に深夜から慌てて大臣まで

呼び出しての状況把握、陛下への説明、臣民への説明に関する検閲を始めました。現地への急行は近衛連隊を無理やり動かしました。」
「よく動かせたな…。いや、それよりどうして当事者たる俺のとこに連絡が来なかったんだ？」
「省の老中達が貴方へ頼るのを嫌がったそうです。」
「なるほどな！俺は省と参本とは如何にも反りが合わん。昔からな。軍は奴らの安楽のためにあるわけじゃ無いってことを奴さんらは理解しとらん！」
「私は何も聞いておりません。…近衛連隊から１０人程が急行、実働しまして、急ぎ陸軍病院に搬送、更に急いでカルテを作ってもらい、正式に検死を行い、そして安置所に仏を入れたとのことです。」
「しかし、ここからが本当の問題です。急行した１０人も、１０人揃って赤い眼を見たと証言するのです。更に、…これは大変言いにくいのですが、検死の結果死因は強靭な顎で肉だけでなく骨ごと喰われた事による失血死。食害による喰われた跡には似ているが熊ともまた違うというのです。」
「長くなりましたがこれで、最後になります。新聞に掲載許可を出すために検閲担当の部署へ向かう事になりまして、そこで周辺住民からの聞き取りの結果をまとめたものが偶々目に入りました。そこには「鬼に喰われた」そう書いてありました。そして、遺体を安置所に収容した翌日に収容されていた病院から二名の遺体と夜勤で非常勤だった看護婦一名、同じく夜勤で非常勤の薬剤師一名が失踪致しました。」
「お前さんは…。思ったわけだ。」
　コクリ
「…は…ッ…ッはい。」
「鬼が本当に食ったんじゃ無いか、と。そして、その鬼が失踪した夜勤の看護婦と薬剤師なんじゃないか、と。」
「……はい。」
「まぁ、それは憶測の域を出ていないわな。単に次の被害者かもしれん。」
「…私としましては、其れ等をぼやかした上で単なる重要案件として

捜査の統括を行うように辞令をお伝えに来たわけです。」
「なるほどなぁ。…よし。ご苦労。帰って良いぞ。良い話を聞いた。」
「…私は…応援しております。私は陸軍省の前は閣下と同じ騎兵畠でしたから。…日清日露でのご活躍は正に英雄です。」
「…何と言うこともないよ…長く生きすぎただけだ。」
「それでは。陸軍省大谷中佐退室いたします!!」
「気をつけて帰れよ。」
バタン。

「1，０００年ちょっと前のヤツとか……まさかなぁ？」

嫌戦軍人

嫌戦軍人

名前：崇坊　運（たかまち　さだめ）

所属：大日本帝国陸軍　東京憲兵司令部司令官憲兵大佐（原作開始前）

旧８期（明治１６年９月入校、明治１９年（１８８６年）６月２５日任官、１４４名）

士官学校をびりっけつ（当たり前であるやる気がないんだから）で卒業。これ以前の記録は残っていない。

日清戦争後に陸軍騎兵乗馬学校へ入学しこれを卒業。

歩兵少尉から　正式な　軍歴を始め、日露戦役以降は騎兵科で軍務に従事した。

（乗馬長靴がカッコいい、落馬したら速攻で除隊できるかもしれないという希望的観測から日清後に志願したという）

…残念ながら彼の軍馬が彼を振り落とすことは決して無かった。そもそもは騎兵畠出身であった。

＊幼年学校・陸軍大学校は出ていない。

日清戦争（１８９４．７．２５［明治２７年］～１８９５．４．１７（１１．３０）［明治２８年］）

日露戦争（１９０４．２．８［明治３７年］～１９０５．９．５［明治３８年］）

歩兵少尉に任官後は両戦役に従軍する。

これらの戦役で金鵄勲章など多数の戦功章を賜る。

功五級（日清）、功四級（日露）、功三級（日露）を昇級のたびに順次受賞している。またこれらは全て最前線においての武功抜群によるものであった。

＜日清・日露戦争での昇級など＞

日清戦争ー１８９４年　開戦当初から従軍（陸軍歩兵少尉）

ー同年７．２９　成歓の戦いに従軍
ー同年９．１５　平壌の攻略戦に従軍
ー同年１０．２４　鴨緑江作戦に従軍（上官への反論で昇級取り消し）
ー同年１１．２１　旅順口の戦いに従軍（第二軍）
ー同年　陸軍歩兵中尉に昇級
ー同年　功五級金鵄勲章授章
ー１８９５年１．２０～　威海衛の戦いに従軍（第二軍より異動）
ー同年３．４　牛荘作戦に従軍（第二軍より異動）
ー同年　終戦　戦間期の武功抜群と優れた前線指揮の功績により陸軍歩兵大尉に昇級

＜１８９５年頃　陸軍乗馬学校へ入校、卒業（騎兵大尉）＞
＜１９０３年頃　陸軍騎兵少佐に昇級＞

日露戦争ー１９０４年　開戦当初から従軍
ー同年５．２６～　南山の戦いに従軍（第二軍）
ー同年６．１４～　得利寺の戦いに従軍（第二軍）
ー同年　陸軍騎兵中佐に昇級
ー同年　功四級金鵄勲章授章
ー同年８．２６～　遼陽会戦に従軍（第二軍）
ー同年１０．８～　沙河の戦いに従軍（第二軍）河を挟んで戦況が膠着、第三軍に異動
（上官と対立し異動命令が出る）
ー同年１１．２６～　第三次旅順（二〇三高地）総攻撃に歩兵として従軍（第三軍）
（上官の作戦を批判し昇級取り消し）
ー１９０５年　第三軍より第二軍へ異動（元隊に戻る形）
ー同年２月～　奉天会戦に従軍（第二軍）

ー同年　功三級金鵄勲章授章
ー同年　終戦　騎兵大佐に昇級

彼は陸軍の最前線指揮の大家と稀代の騎兵将軍となることを多くの佐官以下の同時代の多くの前線指揮官達、下士官達から嘱望され１９１０年（明治４３年）には陸軍少将にまで昇級する。
そして遂に１９１１年（明治４４年）ー陸軍（騎兵科）中将に昇級
功一級金鵄勲章授章

しかし…
１９１２年（大正元年）　降級　騎兵中将位剥奪　以降陸軍大佐
＜２年間の謹慎処分＞
１９１４年（大正３年）　復帰　騎兵科（近衛連隊）追放　憲兵科へ異動　憲兵大佐
同年　陸軍東京憲兵司令部司令官に就任
そして現在…
１９１４年Ｘ月Ｘ日　「憲兵二名惨殺事件」の捜査本部統括指揮の任を拝命

彼の栄達が途切れたのは日露戦役での第三軍の第旅順戦略・戦術への批判や乃木将軍殉死への明確な批判、陸軍内部の如何なる派閥への帰属も断固拒否の姿勢を通したことが原因に挙げられるが、最大の原因は戦中に度々受けた国家からの御嘉賞に対する批判と平時よりの反戦的行動である。
「まともに読めない小難しい言葉選びを要する手紙を書く暇があるなら、援護物資を要請するための電報を打ってくれ。」
「戦争なんかするもんじゃない。軍人だって実際に戦わなきゃならない前線の奴らは戦争なんかしたくないんだよ。前線の三寸先は闇。だけど軍人なもんだから勝たなきゃならない。」
「最近のお偉方は段々と地図が札束に、銃と指揮杖が料亭の箸に変わってきてるから心配だね。」
公式の場でこそ発言しないものの、陸軍内での権力者達はこれを見

逃さず、重大な名誉毀損として厳責。
彼は陸軍軍政の中枢、更には一時転科していた参謀本部作戦課からも追放され、憲兵という一般には嫌われる職へと追いやられる結果となった。

暇乞いと限りなき螺旋

「貴方の永い永い生命は神にも勝る美しき光を放つのです！」
「唖々!!我が父よ!!どうかお供させて下さい！貴方を遺して如何して逝けようかッ！ぁ貴方から離れるくらいならば、私は人の身すら惜しくない！限られた美しさなどいらない!!どうかっ…どうか、貴方の御側に！」
「愛しい貴方よ、何故か！何故私を遺して身を罷られたのか！…ぇぇ。ぇぇよく分かりました…私はぁッッ！貴方に拾われたあの日！あの時から！貴方の、貴方様のッッ！サダメ様の子です!!私は常に強くありますとも！」
「必ずっ”っ!!”!!仮令…”” 冒すべからざる御業”” を以てしても！…貴方様に救われたこの身の定が尽き果てたとしても!!」
「必ず。必ず貴方の御側に参ります。」

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー
ずいぶん昔のことを思い出さなければ考えもしなんだ。

あれあの日は火の焚きにくい日だったのぉ。
坊を拾った日だよ。
懐かしいらねぇ。
雨が降るような、八咫雲がうざわうざわと喚き混む日だったな。
何時ぞやかねぇ、一代十代の千年と少しかな。
俺の頭の上で鴉が鳴くもんだからと足早に山に向かってた。
争いやらには疲れてしまって山籠りと洒落込んでいた訳よ。
そしたら如何だ赤子を焼こうとしてる訳だ。

どうにも心象が良くなくてなぁ。
御偉方がくれるもんだから使わぬ金はいくらでもある訳だ。
金で買うのもどうだろうかと思う事だが呑気にしてはいられなかったからな。
買った赤子を抱いて家…古屋に帰ったな。
やけに泣かない賢い子だと思った。
育てればすぐに大きくなった。
思った通り路傍には惜しい大粒の玉だったよ。
…俺からしたら子供を育てたのは久しぶりだが初めてじゃない。
初めては上司の娘を育てて、その娘と最初に契ることになった。
…永い多幕の一幕に過ぎねぇが、俺からしたら皆んなこの世に一人きりの勿体ない伴侶だ。
だから、子育ては辛くなかった。
寧ろ可愛くてついつい甘やかしてしまったと思うよ。
……
……変わったんだよ。
俺じゃなくて、坊がな。
愛しや可愛やと撫で持て囃すうちにすっかり育った坊は俺より背も高く力も強い、意志の堅い立派な男に育ってくれた。
俺からしたらもう外の世界に出る頃だろうと考えてた。
俺もそろそろ武士やら公家やらとに忘れてもらえた頃だと思ったからな。
外の世界に行こう。
お別れだ。安心しろ、また逢える。
そう言って古屋から俺は一足先に出ようとした。
だのに体が動かん。
撲る様な勢いで俺の脚や腕やにしがみつく坊がおった。
スルスル、ゆるゆると俺の身体を登る坊の腕や手が体を弄りだすから離れろと言うが黙って首を左右に揺らすばかりだった。
埒があかんと体に力を込めると後ろからガバリと覆われてしまった。

坊や、大きくなったの。
そう言ったっけな。
俺の肩首に頭を擦り付ける坊の顔は見なかった。
坊は俺の顔をじーっと見とった。
揺れるような瞳が虚に湿るのが目に浮かんだ。
飾り気のない家だ。
だが長く住んだもので愛着があるものよ。
金銀を幾つか入れてから出ていこう。
誰に言うのかも決めないうちに口をついてそんな言葉が出た。
空気が緩まって俺の身体も動き出した。
朽ち掛けの木箱の中は幾らあるのか数えたるのが億劫な程に金子銀子で溢れていた。
いつぶりに開けたのか思い出そうとしているうちに、またあの手腕が伸びてきて首に絡まった。
低い声でボソボソと言うこの坊には困ったものだ。
黙って金子を幾らか懐に入れた。
殆ど開ける前の量と変わってないが、それでいいこととする。
全部坊にやる。俺には要らぬものだ。
俺は今度は足腰を強くもって光の差す入り口に向かった。
開け放ちの玄関への別れもそこそこで仁王立ちして背中の坊やに初めて話しかけた。
坊よ、御前には生きにくいかもしれんが二十年もこんな男と過ごしたんだ。
御前は大した男だと俺は知っているぞ。そんじょそこらの凡々とは違う。御前は立派に育ってくれた。
さぁ、もう飛び立ってもいいだろう。
俺はここで永く暮らしたが、御前が来たのは何かの節目だったのだろう。また俗世に揺蕩う事にした。
また来るその時に逢おうな。
もう行くぞ。幸せになれよ。
それを最後に俺はもう脚を止めなかった。

あれから一千年と幾年だろうな。

四方や誠と申すまいな。
のう、坊よぅ。艶坊よぅ。

無惨よぅ。
ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー

俺の統括の下、事件の捜査は号外の出された当日の午後3時には始まった。

まず最初に行ったのは班編成だ。
実働、もとい憲兵としての職務から動かさない者たちを除いて編成した。
両方の仕事をさせるのは気の毒だからと捜査班に割り振った連中には当直を暫く免除した。
一応は権限の範囲だと思うが、間違ってたら間違ってたでどうにかなる。
俺の階級が今度は少佐か中佐に落ちるだけだ。
さて、大体1ヶ月で班は交代及び引き継ぎを完了させる。
本部の仕事は東京本部内で回す事になりそうだがね。
地方にも憲兵がいないわけじゃないから此処ばかりは感謝だ。
分担しても伝達までに時間がかかるからな、気長にやるつもりだ。
まだ何の手がかりもない。
それどころか重要参考人も始まる前から消えてる始末だ。
看護婦一人と薬剤師一人の痛手は意外と響くかもしれん。
人相やら特徴やら習慣やら。
聞き出せることは全て周りの同僚に聞く他ないか。
さて、だがしかし捜査の根本はこの事件にどんな可能性があるか、と言う話だ。
他殺はほぼ確定だとしても、だ。
どうしてコイツらを殺す？
誰がこんな殺し方をする？
どうやってこんな風に殺すんだ？
永く生きてきてもこんな死に方はそうそう無いな。
三毛別や石狩沼田幌新は熊の仕業だったが…それとも違うと言うし。
でも武器じゃないらしい。
口、牙、歯、なのに人サイズ。
どうにも不可解なのだ。
刀で殺されたら血が飛ぶ。
刀を伝ってパパっと血飛沫の様なもんが汚く壁についちまうと思

うんだが…それも無い。
…いや、近場に似たもんが見つかってはいるのだ。
だが、この捜査資料には二人の被害者が軍刀を使用した形跡はないと報告してる。
使用したのは新米士官が拳銃を数発。
3発かな？
古参将校の方が即死。
抵抗の余裕はなかったと言うわけか。
位置関係的には新米が過度に警戒して近づき過ぎなかったのか、古参が熟練に任せて接近し過ぎて即殺害されたか、だな。
どっちみち殆ど不意打ち若しくは抗い難い強い力によって即死だな。
…いや。
新米の遺体の近くには指で地面を引っ掻いた跡がある。
指には血痕や擦り切れが酷い。
…生きたまま喰われた、そう捉えるべきか。
古参の死体は損傷が少ない。
側頭部と頸部の裂傷、これによる動脈の切断及びそれに伴う出血多量。…失血死だな。
…即死だな。
遺体の発見当時若手の遺体の周辺はまだ血が湿っていた。
身体をほじくって食べていたことで体内の血液が順次外に流出していた為に乾く暇がなかった事が推測されるな。
対して、古参将校の遺体は頸部からの血が周囲に飛びっていたとは言え、飛び散った分は軒並み乾いている。
ついでに言うと古参の遺体の方には死後硬直が顕著だと。
ここまでの情報を一度まとめてみようか…。
俺は傍のペンを手に、お上への報告書類に重要事項や捜査過程で浮上した可能性を書き連ねていく。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー

お久しゅう。
如何にお過ごし遊ばされる乎？
奥方と子は健やかである乎？
兄弟仲と夫婦仲は円満に尽きる。
暫しのお暇に候。
また逢おう。
或いは然らば。
健やかで在れよ。
我は去りぬ。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー

「あわよくば私に死を。」
「強きも弱きも私の前には阻むものがない。」
「つまりは、私を受け止めるべくもまた無いと言うわけだ。」
「誰かに与えられるのは死のみ、強さの証明のみ。」
「…それでも良かったのだがな。サダメ殿と出逢わなければ。」
「私は…貴方にあまりにも大きな恩を受けてしまった。」

「その恩は深く広く温かい…とても私の拙い全生涯をかけてもお返しできようにない。」
「限りある死が私に打ち勝つまで、私は私のあるがままに進むよ。」
「けれど、死が私に打ち勝った後には、貴方の為に我が御霊は在りましょう。」
「今では在りませんが。だけど、必ず。」
「貴方の元に向かいます。私の身が朽ちようとも。必ず向かいます。」
「私の意思が。」
「私の想いが。」
「私の愛が。」
「きっと貴方の元に届くでしょう…貴方はとても穏やかで隙がないようでいて抜けているところもある方だからお気づきになられぬやもしれません。」
「けれども貴方はそれでいい。」
「　貴方　と　うた　に出会えて　縁壱　は心底幸せ者です。」

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー
爾生きる覚悟はある乎？
生命の螺旋は意思の継承たれ。

収支ニ怪シキ感有リ

収支ニ怪シキ感有リ

やっと尻尾を掴んだ。

俺は部下に茶を淹れるよう命じて退室させた。

流石に俺も疲れた。

書類仕事も数えて千と何百年目の大ベテランとはいえだ。

ここ1週間と少しで過去約二十年分の首都圏を中心とする軍民官の省庁・部課は勿論のこと主要な財閥や企業、地方の地主に至るまでの一般収支合計に目を通しまくった。

不正、特に金の流れは滞っても盛んでもいい結果を生むとは限らないからな。

それに、最近は如何にも好景気に向かう雰囲気が気に入らん。

こう言う時は軍の上層部からも財閥からも何かと黒い噂が沸き立つ頃合いだ。

癒着への告発を抑制するための見せしめか、はたまた縁故の私怨による殺害か、何らかの組織による口封じか、単純に他の事件に巻き込まれたのか。

そう言う検討を行うためにも、俺はまず会計を洗ったわけだ。

…まぁ、今回の事件以前からきな臭い金の出入りを小耳に挟んじゃいたんだ。

それをはっきりさせたいという思惑もあったんだ。

流石に財務省に見せて貰うまでは大変だったがね。
何が大変って身元も示さずに行ったもんだから一回パクられちゃって大変だった。
ま、そのあとは意外にトントン進みましたな。
基本的に新政府の軍部意外とは仲が悪くないんでね。
俺はハト派の重鎮で極度のインテリだと思われてるらしい。
ま、とにかく大変だったから褒めて欲しい気分だね。
「”足跡消す”のは確かにうまかったが…ぁ俺にはまだまだ甘かったようだなぁ。」

執務室の机の上には二十数枚の紙が散乱。
どれも書類の上方に””極メテ重要ナリ持出厳禁”と赤筆で書かれている。
運はいつもの椅子に深く腰掛けると胸ポケットから万年筆を出す。
キャップを口に噛み咥えると、ゆっくりと一枚一枚吟味し始めた。
間も無く他の部署、具体的には現場周辺と関連者への聴き込み組、陸軍省から”特別な権利”をもぎ取る組、そして”知り合いの坊主”に関してのある一件について、その調書作成組からも報告が上がってくるだろう。
「…沈竈産蛙とはこの事だな。書類の洪水の後は、不正とは言い切れないが、どう頑張っても説明がつかねぇ用途不明の金品の授受がわんさか出てきやがる。民間からも夥しい数の不明金が出たり入ったりもしているな。」
不正。そう言い切れないのはあくまで義援金やら後援金扱いだったからだ。
大企業は足跡を消すのがさすがに上手いが、民間はそう上手くもいかない。
一昔前の金の動きを追うのは大変だったが、維新後に銀行やらがしっかり仕事をし始めたおかげでやりやすい。
「しかしまぁ、こんだけ地方の中でも際立っていればバレるのも時間の問題だったろうに…いや、内部にも鼠が入っていると言うことか？

それとも太いパイプがあるのか？」
まぁいい。
そう言って万年筆でメモを書き込んでいく。
地方、軍部や個人だったら所属などを細かく入れていく。
経済界には余り目立った足跡がないことが浮かび上がってくる。
だいぶ濃く跡が残っていることがわかるのは軍部、警察、司法関係の特に現場勤務者。
軍人は少ないが、奈良の方面と首都圏一円の警察には多い傾向が見られる。
民間の業者委託も幾つかあるが、葬式会社への委託がやたら回りくどいというのは何かが匂うな。
次に地方の有力者のもとに広がる共同体においても幾つかの旧家などが該当する。
…家紋を藤の花に変えた痕跡が残っている家も多い。
元々の家紋や血縁などには関連性は見受けられないため、これらに今回の事件にまつわる金の動きとのなんらかの関連があるかどうかは不明だ。
お上がどう裁断を下すかはわからないが、少なくとも最初の手がかりらしきものは掴んだ。
だがなぁ…犯人の姿が一向に見えてこないのは何故だ？
この手がかりを元に何かしらの縁故がある人物や組織、団体を回るしかあるまい。
「…奈良と奥多摩ねぇ…。」
出張は免れぬと感じて涙する、現在徹夜で十連勤目の崇坊大佐であった。

確定無罪

―――――
１９１Ｘ年　Ｘ月Ｙ日　少将昇級　騎馬一頭贈呈　憲兵司令部司令官を解任
―――――

名ばかりも此処に極まれりだな。
遂に左遷だよ。
いや、漸くと言った方が正しいか。
あの報告書を提出した次の日に出張と称して俺は現場の捜査指揮に引っ張り出されることになった。
現場っていうのは首都圏一円、その中のど田舎と今回の事件と似たような前例が古い記録として発見された奈良方面への出張だ。
ま、実質捜査本部は半月間足らずで解体されちまったわけだ。
奈良なんて仕事で行くのは初めてだな。
何たって昔住んでたからな。
…懐かしい記憶ではあるが、今はいいだろう。
それに、俺にとって大事なのは馬に乗れるってことだ。
これは嬉しい！部下は上手く”特別な権利”をもぎ取ってきてくれたらしい。
はぁ、二度目の将官昇級には期待していなかったが馬に乗れるというなら悪くないかもしれんな。
お高い椅子で寛いで1日が終わる、そんな司令部での日々を懐かしむまではのんびり働くとしよう。

「ふわぁぁ……。まずは、家に帰って寝ないとな。」
いくらなんでも徹夜で十一連勤は辛かった。
二十年分の記録を調べ上げるのはもう懲り懲りだ。
お上から頂いた馬は明日家に持ってくるよう指示したから良いとして…家族になんて説明しよう？
ついて行く！っていう気がするんだよなぁ。
お前と息子に苦労はかけたくないから、家で静かに待っていなさい。
そういうつもりなんだが、そう簡単に折れてはくれないだろうな。
コンコン！
思考に耽りながらも馴染んだ執務室に別れを告げようと荷造りを進めているとドアが鳴った。
「入れ！」
「はっ！斯波中尉失礼いたします！」
「何事か？」
「はっ！件の裁判が始まったとのことです！」
なぁにぃ？
「ずいぶん早いな！」
「いかがいたしますか？」
「馬をもてい！今すぐ行く！」
早速馬が活躍だな。
東京圏内で助かったわ。
それにしてもやたらめったらやることばかし増えるなんて災難だぜ。
まだ家に帰ることは出来なさそうだ。
「調書は鞄に入れてくれたか⁉？」
「はい！確かに！」
「よぉし！こう見えて俺は奉行仕事も上手いからな！ちょいと行ってくる！ま、今回は代理弁護人だけどな。」
「はっ！お気をつけて！」
「あ、…すまーん！「すまない今日も帰れそうにない子供達を宜しく。」

そう”琴葉”に伝えといてくれ！」
「奥方にでございますね？」
「あぁ！手ェ出すなよ！」
「閣下に誓ってー！」
「それじゃ言ってくる。任せたぞ斯波ァー！」
俺は言い切ると本部の扉を蹴破る勢いで駆け出した。
ドドドドド！
家にこそ持ってきていないものの憲兵本部にくくりつけてあった貰い物の馬に跨った俺は、街路の凡ゆる障害物を飛び越しながら目的地に向かった。

「待ってろよ俺の僧友！」

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー
「これより、裁判を開廷する。」
「被告人　悲鳴嶼　行冥。被告は”日の出山殺人事件”において男性一名を極めて残酷に殺害し、その遺体を遺棄した罪に問われており、今裁判の弁護人が欠席しｔ「異議あぁりっっ!!!!!」…閣下、昇級おめでとうございます。だいぶ遅い到着でしたな。」
「はぁ！はぁ！はぁ！はぁ！…え、ええ！少々手違いがあり

まして！少将だけに！」
　シーン。
「…ごっうん！それでは、本裁判の弁護人が確認されましたので、改めて開廷を宣言します。」
……
……
…
……
……
……
……
「よって、被告人は有罪であると判断すべきです！」
「遺体が欠片も残さずに消えてしまったなどということは荒唐無稽な作り話に違いありません！」
「それは誰よりも貴方がご存知なのではありませんか？当時の事件の現場指揮を行い、周辺の捜索、警備責任者をされていた運大佐…おっと失礼しました。運少将閣下！」
「異議あり！」
「運弁護人の異議を認めます。」
「先ず、被告人の有罪を明確に示す証拠は物的証拠をふくめて全くありません。検察側が示している証拠はあくまで当事者以外の人間による証言に過ぎません。」
「その証言もまた人を激しく殴っているのを見た、と言うことと子供が怪我をしていたという目撃情報のみです。」
「しかし！これらには大きな矛盾があります。それは何か？簡単です。何故、子供が怪我をしているにもかかわらず一人として命を奪われた者がいないのか！また、被害者とされる男性は本当に被害者なのか？という事です！」
「私が今回持参しましたこの”調書”には、現在法廷に示されていない証拠がございます。これはある意味決定的なものといえます。」

「弁護人にその証拠の提示を求めます。」
「はい裁判長。どうぞ、こちらです。」
「…これは供述書類ですか？」
「はい。それをレコード盤に録音したものがこちらになります。」
「録音⁉？それは証拠として認められるのですか⁉？」
「前例がありませんが…確かに証拠としての質は高いと考えられますので、証拠としてレコード盤の提示を許可します。」
「常識はずれだ…。これだから英雄殿は…。」
「…それでは、どうぞお聞きください。」
運ばれてきたレコード再生機器にレコード盤を載せると、運は慎重に針をおとした。
……ジジ……
「それでは、沙代ちゃん。これから行冥さんに関してお話ししてくれるかな？」
「は、はい。」
「怖がらないで。こんな固い服装をしてはいるけど一応会ったことがあるだけどなぁ。覚えてないかな？」
「あ！あの時一緒に遊んでくれた？」
「そうそう！僕もお坊さんだったからね。」
「行冥さんと一緒だね。」
「そうだね。僕は彼ほど徳を積めたないんだけど…」
「ふふふ。面白いお坊さん。」
「あの日、僕が沙代ちゃん達のところに着くまではどんなことがあったの？」
「えっ…えっと…。…お、鬼。」
「鬼？（ここでも鬼？）」
「鬼…こ、怖いの。」
「うん。ゆっくりでいいんだ。でも、どうか行冥さんのためにも僕に何があったのか教えてほしい。」
「…行冥さ、ん。行冥さん、が、私たち、を……」
「うん。うん。ゆっくりでいいよ。」

「みんなを、襲ってきた鬼を…」
「うん。うん。」
「行冥さんが…グス…行冥さんが！みんなを、私を鬼から守ってくれたの！」
「私、なのに怖くってみんなも、私も怖くって…それでッ！…ウウうわぁぁんっ…うぅぅ…ごめんなさい！ごめんなさい！」
「守ってくれ、守ってくれたのにぃっ！私、行冥さんがひ、人を、殺したって！言っちゃったの…でもっ違う！違うの！」
「ごめんなさい…。」
「…あ話してくれてありがとう。もう無理はしなくていいよ。泣いていいんだ。」
「ひっぐっ…ひっぐ…うっ、うんっ、グスッ…」
「もうお休み。ゆっくり眠りなさい。あとは僕に任せて、ね。」
「お、お願いします！行冥さんをっ。わたじっ行冥ざんに…謝りだいっ…！」
「大丈夫、その時は一緒に謝ろうな。だから、さぁもう今日はみんなの所に行って眠ろうな。おやすみなさい。」
……ジ……
「被告人。今の沙代というのは貴方の関係者として間違い無いか？」
裁判長は気付けば滂沱の涙を流していた被告人に問うた。
「…間違い…ありませんっ。間違おう、はずがっ！ありませんっ！」
「…鬼というのは子供から見た今事件で被害者だと思われていた男を指す言葉だと考えて相違ないでしょう。頭の両脇に蝋燭をくくりつければ幼児からしたら鬼にも見えましょう。いえ、そんなことをしなくとも、命を脅かされる恐怖から鬼に見えたと考えても責められることではありますまい。」
「…検察官、異議申し立てはありますか？」
「いえ。ありません…。」
ーーーーー
ーーー
ーーー

―――――――

――

―

――――

――

――

―

―――

――

―

「では、判決に移る。」

「被告人　悲鳴嶼　行冥　を無罪とする。今回は不可解な点がかくも多かったことを除いて概ね検察側の尚早な判断への改善を求めたく思う。行冥殿、あなたの僧侶として以上の猛々しい勇気は賞賛されて然るべきでしょう。冤罪を回避することができたのは閣下と少女沙代の功績としましょう。」

「それでは、これにて閉廷！」

坊主・ミーツ・坊主

ボウズ　ミーツ　ボウズ

投獄を免れた後はとんとん拍子で無罪放免。
俺は馬を厩舎に戻してきてから行冥と都心の百貨店を目指していた。
しかし遅々として目的地まで進まない。
何故なら人混みと行冥のしつこいくらいの感涙に狭まれているからだ。

「何と御礼申し上げれば良いかっっっ!!!」
もはや泣き喚く勢いの行冥さん。
「いやぁ、気にするな。俺と君は友であろう。」
それにたじろぐ俺。もう泣かないで。
「しかしっ!!」
いや引き下がれよ！お願いします。気持ちは嬉しいけれど！
「ほらっ！もうその話はお終いだ！折角当日に帰れるんだから早く子供達に元気な顔を見せてやれ！」
お前は子供達のためにも早く帰らなきゃでしょが！といいたいところだが…
「あ、土産を買ってから帰るぞ。金は気にするな俺の奢りだ。今は金子など持っとらんだろう？」
十日も会ってないからな。俺も子供に美味しいものでも買っていきたい。
「…何から何まで本当にっ、なんとお礼申し上げればっっっ!!」
おのれ泣き上戸め…ゾーンに、というかツボに入ったらしい。
ここは都会の街中だぞ！涙ダバダバの大漢の手を引く軍の将官の組み合わせって…土産買いに来たようには見えねぇよ！

俺が泣かせたというか連行してるみたいじゃんよ。
「ほら！シルクのハンケチだ！」
泣き止まない行冥にポッケから取り出した布切れを渡す。
「ハンケチ？手拭いですか？…しかしそんな大切なものをお借りするわけには。」
これだから清貧坊主は…。
「ん！貸してやるっつったんだ。ケチケチ使わずチーンってしていいぞっ！」
「っ忝い！」チーンっ！
いや、するんかい！
遠慮するのかと思ったら普通にチーンっしちゃったよ。
まぁいいけど。
「そら！行くぞ！先ずは菓子でも買っていこう！」
「はい。…この御恩は永劫忘れません。」
「うむ。…まぁ今までの君の徳が報われたのだとでも思ってくれ。」
「…子供達に感謝せねば。ありがたや。ありがたや。」
「はぁ～、まぁそれでいいか！」
気にせずに歩き進めることにした。
人混みて東京の街中は賑やかだ。
ふと振り返ると私に手を引かれた盲目の彼は綺麗な瞳で私に微笑んでいるようであった。
百貨店が見えてきたが、行冥はザ・僧侶といった格好だというのを忘れていた。
仕方ない。呉服屋にでも先に寄ろう。
ーーーーー
「こんな肌触りの良い着物までは流石にいただけない！どうかご勘弁を。」
「何をいうのかカモメさん！日露ん時の俺の前線兵装の方がまだ風通しが悪いぞ！さぁ！こいつも買う！これは今回の勲功者たる沙代ちゃんに買う！だが、そのためには海軍的ハンモックナンバーに則り君が良いものを着にゃぁならん。そういうことじゃないけどそうい

うことに私がしたのだ！」
「…貴方は何故そこまで…。ありがとう。」
「あのぅ…軍人さん、それはお買い上げに？」
「うむ。これを、あとこのセルロイドの櫛もお願いね。」
「はい！お買い上げありがとうございます！」

ーーーーーー

会計　・着物（特大）　男性用　４０円
　　・お仕立て手数料　　５円
　　・セルロイドの櫛　　３円
総計　４８円

ーーーーーー

チャリーンッ！

「私は！拙僧はこの恩をどうお返しすれば…！」
「気にするな！」
もはや笑顔である。

さて、行冥がピシリと反モダニズム的な縮緬の着物を着た所で百貨店へと参ろうか。
「百貨店ですか？どのような食べ物が流行なのでしょう。わたしには皆目見当がつきません。」
「じゃろうな。まぁまぁ、そうかたくならずに入ってみよう。」
肩がガチガチになっている行冥の手を引いて突入した。
俺も久しぶりである。

さてさて。何を買おうか、な。
「おおお、ガヤガヤと周りが音で溢れている。賑やかな所ですね。」
「そうだなぁ。まずはお土産を買おう。早く買わなきゃ店仕舞いされそうだからな。」
「はい。しかし…私は何をすれば。」

「あの子達の好みそうなものを教えてくれよ。何と言ってもあの子達へのお土産だからな！」
「あぁ、見えなくても安心しろ！口に突っ込んでやるから美味い甘いで決めてくれていいぞ！」
「私がいただかなくても貴方が召し上がれば良いのでは？」
「いや、だから…強情だな。まずは君に体験してほしいって言うことだよ！」
「成程…忝い！」
　口に突っ込んでやる！とは言ったものの、何から食べさせようか。
「このままでは日が暮れるな。さぁ一つ目だ！」
　先ずは都会の菓子をご馳走しよう。
「すみません。」
「はいっ⁉？いらっしゃいませっ⁉？（デケェ）」
「すみませんな。コレを一つ。」
「（デケェ）…っは！はい！ただいま！」
　パタパタパタ！
　呆然としていた給仕の女の子が厨房に駆け足で戻っていった。

ーーーーーー

厨房

ーーーーーー

「わーわーーわーーー！でかーい！」
「お、おた、落ち着いてください！」
「いやいやいや！あれを見てみろ！軍人と力士だぞ！角界のスキャンダルとの接点なんか持ちたくないよ！」
「いやいやいや！それこそあり得ませんよ！きっと大丈夫ですって！それより、早く器に盛り付けないと溶けちゃいますよ！」
「あ、そうだった。むむむ、ならお前が配膳してこいよ！俺は関係したくないぞ！」
「はぁ～。わかりましたよ。」

ーーーーーー

「なんだか賑やかな厨房ですな。」

「そうだなぁ。」
　夫婦でやってるんだろうか。
　というか遅いな…まだかな？
「お待たせしました～。どうぞ召し上がれ。」
「お、ありがとうございます！」
「ありがとうございます。」
「それ！行冥よ口を開けてくれ。」
「ではお願いします。」
「それ。」
「？…⁉？な、なんだっ⁉？コレは？」
　驚いとる驚いとる。
「コレは雪なのですか？しかし、それではどうして甘いのか？…コレは！甘い雪なのですか⁉？」
「ぶっふーっっ！アッハハハハ!!成程そうきたか！」
「違いましたか??」
「いやな、見えないゆえ仕方ないのだが、コレは動物の乳と砂糖とを冷たく冷やして固めたものでな、アイスクリンと言うんだ。」
「愛救輪…徳が高いお名前だ…。」
「そ、そうか？…まぁいい。で、どうだ？美味いか？」
「山は冬だと酷く冷えます。しかし、コレは心地よい冷たさですね。子供達は甘いものをとても喜びますので、これを是非あの子らにも食べさせてあげたい。」
「そうか。そうか。なら今度みんなで来て食べることにしようか。お土産となると溶けてしまうからな。届けてもらえることは出来なくもないが、折角店で食べられるんだ。来た時に食べるとしよう。」
「ええ、そうすべきです。しかし本当に甘露ですね。舌が溶けるかと思いました。」
「ははは！さぁ、残りも食べたら次に行こう。ほれ、スプーン。」
「ええ。ありがとうございます。」
　ーーーーー
　厨房

――――――

「いやいやいやいや…バッチリ食べさせあいっこしてるじゃん！」

「いえいえ！一方的な食べさせあいっこを食べさせあいっことは言いません！何言ってるんですか⁉？恥を知りなさい！」

「えぇぇ…食べさせあいっこでそこまで言われるのぉ？」

「当たり前です！私の推測によると、あの食べさせ方はきっとあの背の高い人を軍服の人が驚かせたかったんですよ！これは間違いなく友情の食べさせあいっこってやつですね！」

「いや。うん。よかったね。」（遠い目）

――――――

帰宅

帰宅

「遅くなってしまった…どうしよう。」
「申し訳ない！私がはしゃぎすぎたばかりに…」
「あぁ、いいよ。どうだった？楽しかったかい？」
「はい。それは勿論。世の中の流れがいかに早いのか、ひしひしと感じられました。感嘆の一言に尽きます。」
「そうか。そりゃあよかった。よかった。」
手荷物を山ほど抱えた二人の男が夜道を歩いている。

周りには街灯が淡く灯る。今日だけでいくら使ったことだろう。
軍服姿の男、崇坊　運はそう思った。
今日買ったものは土産の菓子、キャラメル、チョコレート、カステラ、ビスケット、ウェハース、おはぎ、饅頭、羊羹、飴玉など。
子供達への玩具、ブリキの如雨露や鍋、おままごとの食器類、セルロイドの人形や櫛や簪に筆箱。
教育用品に赤い鳥などの雑誌、辞書などを数冊。
子供達と行冥の衣料品。
衣料品だけで１００円は使ったからなぁ。
まあ折角将官様になったんだ、功一級の金鵄勲章まで持ってる身としては屁でもないな。
もともと一日中ぼけっとしてたら金が入るような仕事を与えられてた身だ。
働こう！うん！そうしよう！
「そろそろ、だな。」
「運殿が預かって下さっていると聞きましたが、あの子達はいい子にしていましたか。」

「あぁすまんな、それなんだが暫く家に帰ってなかったからわかんないんだよ。」
その節はすまんな。刑事みたいな仕事をしてたもんで忙しくてな。
「いい子達なのですが…少し心配です。久しぶりに会うのはこんなに緊張するのですね。」
顔が少し陰った。心配症だな。
「…もう会えないかもしれない、そう思ってたからだろうな。」
行冥は眉をハの字にして笑った。
「そうなのでしょうね。」
やはり心配症め。

「ほら。着いたぞ。」
俺の家は築十四、五年のまだまだ新しい洋風の一戸建てだ。
家族…になった嫁と息子と、あと行冥みたいな知り合いの子達を泊めたりとそこそこ楽しく暮らしている家だ。
俺は自分の家が好きだ。都心にあるせいで周りがお高くとまった連中だってこと以外はな。
「おぉ、良い匂いが香ってきますな。」
すんすんと鼻を鳴らす行冥の顔は穏やかだ。
坊主よりも坊主らしい坊主だな。悟ってるに違いない。
とは言いつつも、確かにいい匂いだ。
わざわざ味噌汁でも作ってくれたのかもしれない。
「カステラもアイスも饅頭も食べてから炊き込みご飯も食べてなかったか？体に見合う胃袋なんだな。」
こいつは大変な食いしん坊なのかもしれんな。
「おっと、これはお恥ずかしい。」
また食事に連れて行こう、そう思った。
いい感じに砕けてくれた行冥の様子にほっこりとしたところで運は家主の風格もほどほどに扉に手をかけた。

「ただいま。」

「おかえりなさいませ

……あなた。」

ーーーーーー

ーーーーー

ーーーー

ーー

ー

十数年も前。

俺は琴葉に出逢った。

本当に気まぐれの偶々であるな。

十何年も前は憲兵司令部付きでもなかったから違うとこに住んでたんだ。

たしかその時はボロい借り屋だったな。

昔から知り合いが家に泊まりに来ることはあったんだが、いつもは男鰥の一人暮らしだからと頓着しなかったんだが、壁が薄いせいで隣の家の母屋からの怒鳴り声も聞こえるんだ。

回り回ってそれがいい方向に行ったわけだが。

そん時住んでた家の隣から毎日のように快くない声が聞こえてきて、それがまた日に日に酷くなってくんだよ。

その時の俺はまだ我慢してたんだよ。

国でも神でも借り屋でも、ご近所トラブルに首を突っ込んでいい思

いをしてないからな。
今までで一番悪かったのはそのまま戦争に駆り出された時だな。
いい加減にしてくれよ。
さてさて、それで1週間近く耐えてたんだがある日のこと。
女の悲鳴が聞こえたわけだ。
しかも肉を打つ音まで聞こえた。
あとでわかったが頬を手で叩いた破裂音だった。
俺は嫌いなものがある。
それは俺が嫌だと感じるもの全てだ。
……身も蓋もないって？いいだろ！俺は曲がったことだけはしてこなかったからな！
…まぁ、それでだ。
言っちゃキレちまったんだよ。
それでも殴り込みに行くのは流石に理性が止めてな。
腰の拳銃を空にパーンッ！と4、5回。
案の定中から音は聞こえなくなったんだよ。
そんで5分くらい経ってからその家に乗り込んでった。
その時の俺は階級で言うと騎兵大佐だ。
しかも日露上がりで功三等の金鵄勲章もぶら下げてた。
扉をドンドンドン！っと叩いてな。
ーーーーー
「扉を開けろォ！先程発砲があったと通報があった！俺はここの近くに住む軍人で確認の依頼を警察から受けて参った!!ここを開けろぉ！」
開ける気配はなかった。
が、しばらくして中から女の人が出てきた。
「お仕事いつもご苦労様で…貴方はお隣の？」
「えぇ。！……。」
応対してくれたのが琴葉だった。
窶れているのは鈍い鈍いといわれる俺でもわかった。
もう言葉が出なかった。

「あらっ、ごめんなさい…それで、何か事件でも？」
美しい顔には紅以外の赤が所々にみえる。
頬は淡く腫れていて、手指は隠しているようだが酷くひび割れていた。
「……」
艶やかであるはずの唇の横には痛々しい殴打の痕が俺の視覚を痛めつけた。
涙の痕が両頬に見える。
「あっ、ごめんなさいっ、こんな格好で…転んでしまって…。」
自分の有様と俺の反応に気づいて弁明する様は余りに心苦しい。
どうすれば、俺は何をしようとしていたのか？
痛めつけられた女性ほどに俺から冷静を奪うものはない。
その時だった。
オギャアっ　オギャアっ　オギャアっ
赤子が泣いている。
「……これをやる！それでは！」
体が勝手に動いたようだ。
手持ちの金を財布ごと渡す。
さらさらとくず紙にメモを残してからそれも挟んで渡す。
赤子が泣いているのだ。長居は無用。
「え、あ、あの！」
突然のことに驚いているらしい。無理もない。
声をかけられたが、早くに準備をしたいのでそのまま進む。
「これ、この紙に書いてあること…本気ですか？」
…紙、メモを先に読んだのか。
「…駅で待ってる…。その金は好きに使ってくれていい。」
待ってるぞ。

ーーーーー
ーーーー

ーーーー
ーー
ー

俺は良い女が好きだ。
良い女は母親になれる女だ。
俺は良い男でいたい。
良い男とは父親になれる男だ。
母親も父親もそうだが、血が大事か否かなど俺たちが決めることじゃない。
だから、子供に俺が父親で良かったと言ってもらえるように子供のためなら何でもやろう。
君は俺の妻になってくれるか。
君は俺の子供になってくれるか。
問いかけはいつも同じだな。
変われない俺の隣にいて欲しい。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー

ーーーーーー

お隣に軍人さんが住むことになった。
偉い方らしい。

ーーーーーー

伊之助が生まれた。
この子の為に私は生きよう。
お隣さんから産まれたこの子にと御祝いをいただいた。
優しい顔で産まれたばかりのこの子のことを見ていらしたのが印象的だった。
急ぎの用があるとの事でお話しできなかった。

ーーーーーー

私はどうしたら良いのだろう。
私の身を守ってくれる人はいない。
でも私は伊之助を守らなければいけない。
夫は私を撲る。
姑は私を嫌い、私の苦しみを笑う。

ーーーーーー

日に日に撲られる回数が増えていく。
夫は私から何を奪にも飽きたらないようだ。
伊之助だけは奪われまいと拳に身を晒す。
冬にはわざわざ冷やした酷く冷たい水で食器を洗わされる。
手がひび割れて痛む。
伊之助が暖かい。まだこの子は何も知らない。

ーーーーー

伊之助が今よりも大きくなった時、夫は伊之助にまで手を出すのではなかろうか。

私は伊之助を守る為にできる全てをしよう。

伊之助のためなら何でも捧げよう。

今日はお隣の軍人さんと初めてお話をした。

優しい方だった。子供が好きだと言っていた。

手が痛み、つい顔をしかめてしまった。

そしたら彼は高価な薬を惜しむことなく私に譲ってくれた。

差し上げます。私には必要がないものだ。ですって。

久しぶりに笑うことができた。

ーーーーー

暗い話題は考えたくない。

家にいる間は常に暗い話題がつきまとう。

痛みや悲しみ、苦しみや悔しさ。

今日は彼が東京から帰ってくるらしかった。

最近は勲章をもらう式典やらに出るので忙しいらしい。

勲章を貰うような凄い方だなんて知らなかった。

近所の誰にでも礼儀正しく、子供にも優しい彼は以外と軍服が似合う

今度伊之助を抱いて欲しい。

きっと可愛がってくれるはずだ。

ーーーーー

夫が伊之助のお包みに手をかけた。

私は思わず声を上げた。

どれだけ撲られてもこれほど高い声を上げたことはなかった。
気づけば私は夫に掴みかかっていた。
夫に撲られるがそんなことは些細なことだった。
どうか、何方か助けてください。
伊之助が大きくなればきっとこの男はこの子にも手をあげるに違いありません。
そう願っていると外で何回か大きな音がしました。
銃声でした。
夫は動きを止めて部屋の奥に引きこもりました。
私はすかさず伊之助を抱き抱えて畳に座り込みました。
伊之助は眠ったままでした。強い子です。

ーーーーー

暫くして扉を開けろと声がしました。
ほんの短い間ですがすっかり眠ってしまっていたらしく急いで玄関に向かいました。
お待たせしました。
そう言って扉を開けて顔を上げるとその先には彼がいました。
いつになく真剣な表情でした。
どこかしら怒ってあるような、どこか噛み締めるような気迫を感じました。
彼は挨拶もそこそこに私をじっと見つめていました。
私は何時もなら彼に見つめられた気恥ずかしさで顔を赤らめたでしょう。
しかし急いで出たものだから鏡を見る間も無く、その時は顔にもくっきりと痣が残っていたようでした。
彼はとても辛そうに顔を歪めました。
あぁ、そんな顔をなさらないで。
貴方はただのご近所さんなんですから。
何も悪くないんですから。

何の関係も無いんですから。

ーーーーーー

私は自分の身に何が起きているのかよくわかりません。
彼が来てすぐに伊之助が起きてしまい泣き出しました。
鳴き声を聞いた彼はきっと口を結ぶと私にずっしりと重みを感じるお財布を渡してきました。
そして、懐から紙の切れ端をだしてそれに万年筆で何かを書きつけてそれも私に渡したんです。
彼はそのまま行ってしまおうとするのです。
混乱した私はまず渡された紙に目を走らせました。
文字でも読んで落ち着こう、そう思ったのでしょうか。
そこには「今日駅で待っている。渡したお金を使ってどうにかして伊之助と二人で駅に来なさい。俺と暮らそう。」
そう書き殴られておりました。
私はつい声を張って彼の背に問いかけました。
本気ですか？と。
子を産める体ではあります。
しかし私はすっかり痛めつけられたキズものです。
伊之助だって謂わば連子です。
二人人間が増えるのを養うなど簡単には言えません。
だのに、あの方ときたらぽつりと駅で待ってると、そう言うだけだったんです。

ーーーーーー

私は心を決めました。
夜になって周囲は暗くなっておりました。
彼からいただいたお金を使ってお酒を買いました。
いつもより良いお酒です。

あの男に飲ませると暫くして酔い潰れました。
私はあの男の酔い潰れて間の抜けた顔を覚えていません。
ただ、その男の顔を見た際に昼間に見たあの方の顔が思い出されたのは未だに覚えています。
私は伊之助のお包みを二重三重に重ねてから腕の中に抱きました。
あの日の夜は冷えたんです。
まだストーブは売られていませんでしたから。
それから、箪笥に入っている貴重品を幾らか。
嫁入り前に使っていたものだけ持っていきました。
あの男と関係するものは例えどんなに価値あるものでも伊之助以外は決してあの方のもとにゆくのに持っていきたくなかったのです。
結局櫛や鼈甲細工なんかの貴重品を懐にしまいこみ、忍足で家を出ました。
あの方からいただいたお金で道中足元を照らす灯りを買いました。
その後はひたすらに歩きました。
もう居ないんじゃなかろうか。
待っていてくれるだろうか。
そんな不安は全く抱きませんでした。
あ、一つだけ。
道中で虹色の目をした男性から声をかけられたことがありました。
「父様（ととさま）がお待ちだよ」、と。
そう言われた気がします。
その後はまるで惹きつけられるように彼がいる駅に向かいました。
彼の息子さんだったんだろうか、と今なら思います。
けれど、契った後の今でも彼は息子はいないと言うんです。
自分の息子は伊之助だけだから安心しろ、といつも言ってくれるんです。
私は気づけば駅に着いていました。

ーーーーーー

一緒　壱

一緒「参内」

俺は荷物の支度を一刻も過ぎぬうちに済ませた。
風呂敷一包みだけだった。
中身は歯ブラシ、双眼鏡、勲章類、予備の上下兵装とへそくりを少々。
服装は平時も大抵が軍服だし、元々大したものも置いていなかったからな。
建て付けの悪い扉をどうにか開けて外に出た。
まだ明るいがこれから用事があるのでな。
暫く世話になった我が家への別れも告げずに俺は足を急がせた。
家を出て向かうのは駅ではない。
待ち合わせまでの時間はまだある。
俺はここ暫くは男鰥だったせいで何かあの人に差し上げられるものも持ち合わせていない。
だから、せめて過去の苦労に悩まされることなきよう出来ることをしようと思う。
俺は長く生きてはいるが嘘と数学がどうにも苦手だ。
だが今必要なのは上等な嘘だと見えた。
だから誰かに頼むことにした。
アイツは孝行息子だから寧ろなにか土産でも持っていきたかったんだが今は自由に使える手持ちもないので手ぶらで行くしかなく心苦しい所だ。
つくづく準備の悪い親父ですまん。
ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー

ー

絢爛な建物には一際巨大な看板に”万世極楽”の文字。
五十年ちょっと前までは俺の下手糞な揮毫が使われてて驚いたもんだ。
頼むから俺の汚い字を公衆の面前に晒さないでくれと再三頼み込んでやっと下ろしてくれたっけな。
俺は習字が苦手だからな…。
それに比べて今の書は…うんうん。
名筆と言える出来栄えだな。
それにしてもどデカい屋敷と広い敷地だ。
何坪あるんだ？前よりも増えてないか？
何処からこんだけの建物を建てる金が出てくるのか知らんが、俺の目的はここの”教祖様”だ。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

万世極楽教の本尊もとい教祖がおはす別格に荘厳で豪華な寝室には今二人の男がいる。
片方は信心深さのかけらもなくピシリと俗世の軍服を着こなす男。
もう一人は奢侈ともとれる赤黒い見事な着物を見に纏った七色の瞳を持つ柔和な表情を浮かべた若い男。
双方堅苦し過ぎず、かと言って話を弾ませることもない。
若い青年にとって、この沈黙は心地の良い沈黙であったが、それを窺い知れるほどの起伏が彼の面には現れていない。
いや無理に表さなくとも良い相手であると云うべきか。
彼にとって気のおけない相手というのは目の前の男ぐらいなのだ

が、当人は何か居心地悪げに勧められた上等の座布団に収まっているようで、全く青年の機微には気を向ける余裕もないようだった。
軍服の男はここに招かれてから5分が立つ頃にやっと口を開いたかと思うと、座していた上座の座布団から横に退くとその頭を畳に擦り付けんばかりに平伏して言い放った。
「頼む!!この通りだ!琴葉さんと同居しなさってる旦那と姑をどうにか誤魔化して欲しい!あの人はもう十分に苦労したんだ。」
未だ七色の瞳をもつ若い青年の思考は彼との間に漂っていた心地よい沈黙に向いていたが、少なくとも驚愕の感じは心中で起こっており、間も無く目の前の事態に注目し始めた。
「あの人と子供の二人を養うくらいはなんてことはない。」
自身の後頭部に視線を感じた客人の男は続けて言う。
七色の瞳をもつ青年は沈黙で続く話しを聞く意思を示した。
「だけど、あの人は優しい人だからずっと黙って去ったことで悩むんじゃないかと思うんだ。」
青年からしたら目の前の男から何かを頼まれて断ろうはずがないのだが、いつもこうして偶の頼みに託けて少しでも長く共に居ようと、静かに彼の吐露に耳を貸すことにしていた。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

一緒　弍

一緒　暗澹

今までの百年と少し余で男に頼まれたことと言えば大概が若者と女子供の為に彼らの苦痛の元や悪縁やらを切る手助けに纏わることだった。

その度に何かと苦労をしてきたのに懲りないあたりを見ると、相当な物好きであり奇特な御人好しなのがよく分かるな、と青年は心中でクスリと笑った。

目の前の男は本当に変わり者だ。

青年は一人幼き日々の出逢いを思い出した。

出逢いの端緒となったのは大病を患ったことだった。

色狂いの父親とそれに呆れて心を病んでいく母親。

実子を神輿に担ぎて飯を食うなど碌なことではないが、愛はなくとも商売道具である俺に死なれては流石に困るらしかった。

珍しく恭しく自らの世話をしてみせる不道徳な両親に思うことは別段なかったが、強いて言うことは信者に神の子が病などとは言えるはずもないのだろうと他人事のように考えていた。

まさか病にかかるなど想像もしていなかった。

だが落胆もなかった。単に数日前まで壮健だったに過ぎない。

あっという間に病は体を蝕んだ。

誰かが言った。

「橡の髪色は喪服の色と同じだ」と。

施術をしても医師の多くは口々に命定だと言い、札やら御守りを勧めるくらいであった。

毎日のように訪れては特に何も施さない、施しようがないと匙を投げる医者のうちの誰かだったかもしれない。

だが、その言葉を聞いてからというもの俗な本質を溢れさせた両親は俺の病のことを特上等の演技を以て信者連中に打ち明けた。

信心深い大人たちは愚かにも自身に降りかかる大病を厄災の肩代わりだと宣いだした。
時は明和の頃、人々の信心深さは折々に襲いくる疫の役によりいよいよ深まる時代。
小児の命定に災厄だ何だと騒ぐのは身内の斜な大人たちくらいである。
御江戸の将軍様も似たような病で死んだと聞く。
将軍が死ぬのだ、神の子の神輿如きには荷が重い。
彼らは以前にも増して祈り入れ上げるが、だからと言って何が変わるということもなかった。
慇懃に持て囃される日々に感情も印象深い出来事はない。
闘病の期間は一週間、二週間と延びていく。
両親が齷齪と医者探しに奔走する様は滑稽だった。
虚しい快が息苦しい胸中で騒めいた。
体を横にして来る日も肉体の苦痛からくる不快に顔を歪めることを除けば何処までも静寂な時間であった。
ひどく空虚であった。もはや快不快すら無くなったさながら暗黒に一人漂流しているようだ。
珍しく心中に残念の情が生まれた。
闘病から一月余、一人の男が目の前に現れた。
いや、正しくは招かれたのだが死の淵に立つ青年からしたら久しぶりに強く快を感じた不思議な存在が突然に現れたと言う方が都合良かった。
この男は過ぎた好色が祟って湿（黴毒）の病を患った少年の父親を内密に診たことのある僧医であったが、それは少年の知るところではなかった。
故に少年が男を知らずとも、男は診察の度々に周りから神輿に担がれては色のない笑顔を貼り付ける少年の歪を見抜いていた。
同時にその環境原因たる周囲の不甲斐なさもよく知るところであった。
男は明らかに少年の両親への軽蔑を露わにしていたが、まもなく彼

らを追い出し襖を閉めると布団の上の重病人に向き直った。
男は前掛けのような白い服を法衣の上からきているようだった。
男は先ず水で手を手首まで清めると懐から布に包まれた細長い芯の通った何かを取り出し側に置いた。
次に、顔からは血の気が失せ、元来の輝き陰る虹の瞳を擁する少年の頭に手を置くとゆっくりと、しかし明確に語りかけた。
「俺の名は崇勘という。見ての通り坊主をしている。何時もは放浪の旅と称してのらりくらりしているのだが、こう見えて俺は腕のいい医者でもあるんだ。…これから君にはある液体を飲んで欲しい。これが謂わば俺の評判の素、もとい秘薬なんだ。飲みにくいかもしれんがどうか飲んでくれ。一滴でも喉を通ってくれれば必ず君は良くなる。」
そう言い切ると彼は先程取り出して置いた細長いものを包んでいた布を外し、その布で虚を瞳に映す少年の両眼を覆った。
目を塞がれた少年はふと考えた。
このまま死んでみるのはどうか、と。
快不快などない故に特に思うことはないが、何処となく漠然と生命活動を継続させることへの面倒臭さが鼻についたのだ。
大病とは日頃垣間見えぬ己との対話を否が応にも勧めてくるものらしかった。
自身の死が何を引き起こすのか、遅ばせながらも心中に浮上した無垢な好奇心は一層この実験を魅力的に飾りつけた。
死を前にしても恐ろしいという感情は生まれなかった。
極楽などないのだから。
だから、声を振り絞り坊主の医者に言ってやる。
「……い……い……なおさっ……な…くて…いぃ……」
姿は見えなくとも男の姿が止まったのが分かった。
「……い…き…て…ぃ…ても……つまら……ない……めんど…さぃ……た…のし…ない……うつ…くし…も…ない…」
神の子云々という戯言に付き合ってきた、幼くも天賦の頭脳に恵まれた少年は両親をはじめとした人間全てを既に見下すように考えて

いた。
見下すというよりは救えない存在と言った方が彼の無機質な心情にはあうかやもしれない。
たとえ優れた頭脳をもっていても、特異な髪や眼の色で持て囃されても、神の声も聞こえなければ神の存在を信じたこともない。
その疑心の感はこの死の淵にあって彼の心中に完成していた。
救いはない。神はいない。
目の前に座す坊主も神主も両親や信者の愚か者どもに同じであろう。
諦めたか、驚いたか、さぁ坊主なら本当の救いとやらを下さいな。
小馬鹿にするように無理やり顔面の筋肉を総動員して口角を上げて見せた。
感情もなく、愛されることもなく、存在の本質を認められず求められず、柔和な鉄仮面で心身を覆ってきた、大人の都合で祭り上げられ神の子を演じざるを得なかった、無感情な彼の、否、何も知ろうとされずに人の狂態に育まれてきた歪な少年は、彼も気付かぬうちにその真性を狂わされていたのではなかろうか。
皮肉にも死の淵に彼が言い放った言葉は本来あるはずだった彼の真の胸底を言い表した。
真実を寄越せと、救いを寄越せと。
それを最後に少年は布の下に潜む瞳を閉じた。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

一緒　参

一緒　御心振り奉りて

しかして無意識の魂の叫びは、不変に苛まれつつも決してその性分が変わることなく生き抜いてきた一人の御人好しに拾われる事となった。

「親か？」

少年は意識が覚醒するような錯覚を覚えずにはいられなかった。

はっきりとそう聞き返された。

男の、坊主の声は先程とは打って変わって芯があり、温かいというよりも身体深くに響くような包容力と威厳に富むものへと変容していた。

少年は何故か口を開くことができた。

声は出なかった。

口から音が発せられることこそなかったが、代わりに口の中に今まで味わったことのない刺激を感じた。

「……コク……」

飲んだな。

押し潰すような男の声が聞こえると顔の布が除かれて昼の光が目に入ってきた。

男が耐えていたのは痛みであるか。

目を全幅開け放ちて見ると男の苦痛に歪む顔はない。

だが、襖を開け放ち、仁王立ちの男の手には案の定赤く汚れた小刀が握られており、今ほど刀身を拭いた先ほどまで少年の視界を遮っていたであろう白い布には赤い滲みが、男の額には大粒の汗粒が浮かんでいる。

「俺は痛いのが嫌いでな。…どうだ？少し外に出てみないか？坊は世間知らずの様だからな。」

この男は何をいうのだろう。

いかなる良薬だとしてもそう早くに治っては道理にあわない。
少年は己の身体が動かぬことをこの愚か者に教えてやろうと起き上がるつもりで身じろぎをした。
むくり。
上体は腹筋の収縮軽やかに重力に垂直な角度にまで起き上がった。
「…え」
少年は恐らく生まれて初めての驚愕に驚いている。
心身の生理的不快は全く消え去っている。
手を開き握ってみるも神経の伝達に不具合は見られない。
立ち上がろうと思えば立ち上がれる。
肉体が丸々入れ替えられた様な感すらあるのだ。
「よし！ではでは元気になられた様だから遠足と洒落込むかっ！」
男はそういうと少年を軽々と抱き上げると足を踏み鳴らして寺院から飛び出した。
少年は焦燥こそないものの、困惑を隠せず、だが動き出したものは止まれんと男の法衣の裾を握った。
ぐんぐんと生まれてから一度も出たことのなかった生家から離れていく。
あたり一面の一切合切が新鮮かつ独創的であった。
広い世界には色々な大人がいた。
侮蔑の上にあった大人という動物への印象は偏見となる前に解かれた、皆が皆祈り唱えずとも生きていけるのだ。
少年は生まれてこの方祈る大人か泣く大人しか見てこなかったのだから。
男は方々に歩き回っては腕の中で行儀良くじっとしている少年に語りかけ続けた。男は博識で何より大のお喋りだった。
「空を飛ぶ鳥にも種類がある。知らないからって気を落とす必要はないぞ！世界は些か広すぎるから知らないことの方が多いに決まってるんだ。」
「いつも何を食べているんだ？」
「あ、食べ物と言えばな、何も高い安いだけじゃないくて”お袋の味”

というものがこの世にはあるんだ。」
「コイツは誰しもが持つもので、いつ食べても美味しいが忘れてくる頃や辛い時に食べると一段と美味いものだ。坊のお袋の味は何だ？…無いのか？なら今度何か作ってやろう。どっちかというと親父の味だけどな。
「天候の変化も色々だ。寺を飛び出してから1時間とたたないが雲の動きにも遅い早いがあってみていて飽きない。俺は飽きたが。」
「これから社会はどんどん変わっていくぞ。坊が年寄りになる頃にはきっと社会は色々ゴタゴタしだすかもしれんな。先のことだからあんまり気にしなくてもいいがな。」
「生まれてからずっとあの場所にいて飽きないのか？母ちゃん父ちゃんと遊んだことは？飯は一緒に食うのか？ご両親の仲が良くないのか？」
「勉強は最低限しておいたほうがいいぞ。必ず役に立つからな。あ、特に！特に数学には気をつけろよっ！俺は苦手で苦手で敵わなくてな。坊は賢そうだからどうにかなりそうだから教えておこう。」
「…楽しくないのか？何かしたいことはあるか？どうしたら嬉しい？何か食べたいことや見たいものはないか？知りたいことは？教えられることなら何でもいいんだぞ？」
「……極楽があるか？あんなとこ行ったって暇なだけだぞ？…まぁ無いよりはマシか？俗世の方がよっぽど楽しいと思うがね。…まだ若いのにそんな事を気にするだけ疲れるってもんだ。」
「…人間はないもの強請りな生き物だ。満足したら死んでしまうのさ。少年よタイツ…じゃなくて、大志をいだけ！これだこれ！これはな、偉そうなこと言う奴は大抵失敗してるから安心しろよって言う意味の言葉だ。偉そうな奴だって失敗するんだから俺の様な凡々が変に難しく考える必要はない！そう言うことだ。大事なことは人それぞれだとは思うが、坊が背負わなきゃならんのは自分のことだけだぞ。」
少年は男の腕の中で思った。

生まれてからずっと停滞していた時が動き出したようだ、と。
結局この日少年は男に抱かれて丸半日連れ回されてから帰った。
夕食に生まれて初めて屋台の蕎麦を食べたり、カエルを触ってみたり、何とも忙しい一日になった。
寺院に帰ると両親が血相を変えて出迎えてくれた。
口うるさく心配しただの何だのと宣う彼らは眼中になかったが、どうやっても男の姿が見当たらないことに気づいた。
「さっきまで一緒にいたのに…。」
誰がこんな事を！と父親が言うと母親は祟りだ、あの坊主がこの子に病をかけたに違いないという。
二人は力が篭っていない抱擁で少年を包んだが、少年にはどうでもよかった。
崇勘の姿は振り返っても見当たらず、少年は心細さとも寂しさともいえる一種の不快を感じた。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

一緒　四

一緒　橡が笑う

その日から毎夜何処からともなく男は少年の寝室に現れる様になった。
毎夜風呂敷に土産と話の種とを包んで。
昼間は大人の身の上話を流し聞き、涙を流してやる。
夜には男の用意した菓子や果物、手製の小料理などを肴に男の話す不思議で滑稽な話に聴き入っては、声を潜めては涙が出るほど笑う。
男が”治療”を施してから身体は健康そのものだったが、連れ回した件で一日中少年の周りには信者の男数名が護衛と監視につくことになっていた。
だが、男は必ず少年の部屋に現れてはその日起こったことや少年が望む話を聴かせてくれるのだ。
少年は男の話す恋と愛の話がお気に入りだった。
驚き、寂しさ、怒り、残念、不満、面白い、楽しい……。
どれも男が少年の人生に現れてからは自然と湧いてきた感情だ。
男と共にいる間だけは、平坦で快不快の無い現実が綺麗さっぱり消え去って、代わりに鮮やかな別世界に連れて行って貰える様だった。
少年はしかし自身のうちに芽生えた感情のことを男に教えることは決してなかった。
男は優しく、温かく、そして唯一自分の内側にまで踏み込んできた存在だった。
男が少年に望むことは楽しいや悲しい美味しい、そんな普通を知り、人生を楽しんでくれることだった。
少年は男が少し鈍いことをその聡い頭で的確に推察し、また自身が内包する歪な感情と喜怒哀楽の本質が目の前の男にのみ適用される限定的幸福であると理解していた。
男の消失は少年にとって単に血の通った生涯を送るために必要不

可欠な存在から、自身の理想的幸福そのものを体現する、謂わば信仰と恋愛の対象へと変貌しつつあった。

故に、少年は日々募る幸福と消失の不安の狭間にあって男の語る恋と愛の物語から独自の恋と愛の概形を形成しつつあった。

皮肉にも男の愛情は少年の明るい前途のみならず、望まずして少年に新たな扉を開かせることとなった。

ある意味では良い影響とも言えたが、少なくとも男からしたら重大な問題であった。

が、その生涯において幾度となく同様の経験があるこの男は予測感知能力にだけは恵まれなかったようである。

少年の心中を知ることもなく幾歳月が過ぎていった。

その間にも信者は順調に増えてったようだった。

少年は青年に成長していく。

ーーーーーー

ーーーーー

ーーーー

ーーー

ー

気づけば男は十数年もの間寝室に通っていた。

無垢な少年は今では秀麗な青年へと立派に成長した。

昼夜の生活内容はここ十年間何事もなく継続している。

変わったことといえば彼の父親が信者の女に手を出そうとしたところ、それが男の逆鱗に触れて一悶着あった位である。

少年が父親との交流を持ってみてはいかがか?という男の提案を意識して入信の少ない日に、心配した男同伴で両親の寝所を尋ねたところ全くもって運がないことに所謂”良いではないか〜”の真っ最中に直面したのである。

顔を淫らに歪めた醜い父親の姿と、涙を流しながら許してくれる様

に懇願する信徒の女性の痴態が眼に飛び込む。
布こそ最低限に纏っていたものの痴態には違わない。
男の脳裏に古い記憶が蘇る。
遥か昔のある世界のある時代において基督教会の役立たず共が破門をチラつかせ酒色を貪らんとしていた記憶である。
状況の把握と記憶のフラッシュバックでプツンした男は１００分の一秒単位で行動を始めた。
まず光の速度で男が少年の目と耳を塞いだかと思うと少年を外に遣り、倒れていた女性の涙を０．２秒間かけて丁寧に拭ってやる。
次の０．５秒で女性の肌蹴た身嗜みを整えた。
０．０９秒で彼女を少年のいる廊下にやると静かに襖を閉め切り情操教育の敵に向き直った。
ぴっ！
そんな声を情操教育の敵こと少年の父親（仮）があげたかと思うと男は全力で両手の拳を合わせた。
皮膚が高圧でぶつかり合い甲高い破裂音を響かせた。
男は全身の力を自身の剛指に注ぐと身を屈めて伝説の剣士継国縁壱の抜刀速度の約２０倍の速度で突貫。
あまりの速度に変態こと少年の父親は頭を守る体勢をとったが、これがこの変態の人としての…いや、雄としての最期となった。
超高速で変態の背後に回り込んだ男はその合わせた両手から屹立させた二本の人差し指という名の日輪刀を亜音速で変態の膏肓に突き込んだ。

ア”ッ”ーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!
ア”ア”!!ア”ア”ッお”お”お”お”オオオオオオオオオンンッッッ!!!!!
約１秒間の間にソレを２０数往復。
変態は死んだ。
最強のＰＴＡを自負する男は一仕事終えたことを確認すると、時速

換算で約２０万キロ、雄穴…もとい汚穴から神速で指を引き抜くことで指に付着した凡ゆる俗世の不愉快を滅菌した。
斃れ伏す少年の父親だったソレは自身の下半身から煙を立ち上らせながら泡を吹いている。
当然の報いだとばかりに仁王立ちしていると目の前の少年を避難させた方とは反対の襖から少年の母親が登場した。
斃れ伏しＳｉｒｉから尋常にあらざる煙をもうもうと燻らせる夫、堂々と何一つ恥じることなく泰然自若に大地を踏みしめる男。
大事件である。
ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー
……結局のところ少年の父親は摩擦熱で生殖能力を失い、以前とは打って変わって女性的になった。
有り体に言うと丸くなった。浮気やお手つきをキッパリやめて布教と労働に愉しみを見出している。
母親の方はというとその場で気絶、男が去ったのちに目を覚まして夫の看病を始めたという。
記憶が幾つか飛んでしまったとのことで、謂わばショック療法が働いたことで嫌な記憶が消滅したという。
心を病んでいたものの、先述の記憶の喪失に加えて夫の目覚ましい改悛と性格の代わりように戸惑いつつも背を押される形で改善した様であった。
その後は夫婦ともども教祖の座を退いて仲良く隠居しており、これこそ万世極楽の境地だと信者の間でも好評とのことだった。
そして、これらの事情により青年がいよいよ教祖様とやらになりあそばされるらしい。
ある日の夜にそう本人から教えられた。
両親の跡を継ぐ形になるが、彼の表情に陰りはなかった。

男からしたら青年が人生に楽しみを見つけられるのなら教祖でも何でもよかった。
ただ、気がつけば随分と長居したものだと、そう感慨深げに呟いた。
「俺はそろそろ去る。坊も立派になったことだしな。」
いつでもそうだ。
出会いは別れを演出する為の積み上げに過ぎない。
終わりは必ずくるのだ。
青年は如何にも残念といった具合に顔を顰めると、立ち上がろうとする男に徐に近づくと、正面から抱きついて懇願した。
「いかないで。俺の側にいて欲しい…。」
男からすると其れは青年の激しい感情の振動を強く感じられて嬉しいばかりだったが、男は直感的に近々嵐が来ることを察知しており、長居することは自身にも青年にも得策だとは言えないことを経験上理解していた。
それから男は幾度となく優しく青年を諭したが、青年は尚も縋りついてはどうか共にいてほしいと懇願し、温かい涙さえも溢して別れまいとするのだ。
ならば、と男が提案したのは一つだけ何でも言う事を聴くというものだった。
涙に肩を震わせていた青年の動きがピタリと止まったかと思うと顔をぬるりと男の顔に向けた。
口元に三日月を浮かべた青年が求めたものは思いの外容易いものであった。
必ず会いに来ること、男のことを父と呼ばせて欲しいこと。
そして、一時離れていても良いから”ずっと一緒”にいてくれること。
そして、最後に男の”血”を少し貰いたいということ。
男は喜んで承諾した。
次の日、男は再び放浪の旅に発ち、青年は教祖として万世極楽教の信徒を順調に増やしていった。
彼はいつでも赤い液体の入った小さな瓶を大事に大事に懐に入れ

ていたという。

一緒　伍

一緒　結ぶ

男の旅立ちから数年が経ったある夜、万世極楽教の総本山に賊が侵入する事件が起き複数の死者が出る事態となった。
信徒たちが山から降りて逃げていっても、青年は教祖の座から動くこともなく何処までも冷徹に目の前に立つ血塗れの美丈夫を見据えていた。
美丈夫は貴重品を納めた蔵や戸棚、贅を尽くした法具や飾りには目も暮れずに進み出た。
惨憺たる情景を作り出した本人にも関わらずこの美丈夫の身には血潮一滴すらついていない。
ただ濃厚な血の匂いを振り撒きながら青年の前に手を差し出して言い放った。
「その血を私に献上しろ。その暁には貴様の存在を永遠の時を生きる上等生物にまで押し上げてやろう。」
青年は暫しの逡巡も無く応える。
「残念ですが差し上げましょう!ところで、永遠を生きると言われましたけどそれって若いままってことですか?」
呆気ない。余りにも呆気ない。
懐から何時もより”中身が少ない”小瓶を取り出した青年は大袈裟な動きをつけてソレを美丈夫に献上してみせた。
美丈夫は何かを言いたげではあったが特に何をいうこともなく小瓶を引っ手繰る栓を抜いて香りを確かめた。
「これだ……。あぁ…やっとだ…!!やっと近づけたっ!!」
途端に恍惚と血の香りに酔いしれる美丈夫はケタケタと笑い出した。
「フフフ…。よくやったっ…貴様の”手癖の悪さ”は見なかったことにしてやろう。今は頗る気分が良い!…ふふ、これが幸甚の香と言う

やつか。」
「…早くその上等生物ってやつにしてくれません？」
「…情緒のわからんやつだな…。だが特別に許してやろう。今の私にはこの小瓶を除く須くが些事であるからな。では、私の血をやろう…私の目的のためにその命全てを差し出せ。」
美丈夫は指先から血を垂らす。
垂らされた血は一滴残らず意思を持った様に動き出した。
一つ跳ねたかと思うと青年の手のひらに溜まり飲み干されるのを待っている。
「ずっと一緒って約束だからね。約束は守らなきゃ♪」
一度周囲に目を潜らせると美丈夫の姿は忽然と消えていた。
誰も存在しないことを確かめた青年は独り言ちると真紅の手杯を呷り果てた。
ーーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

目を覚ました青年は自身の座の下に隠しておいた番ひの小瓶を取り出し懐に迎え入れた。
ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

教祖が賊を退散させたとして喧伝され、貴賤双方に広まったこの事件は万世極楽教の勢力拡大に大きな役割を果たした。
庄屋や地主が多く帰依したことで財力を得ることにも成功し、教祖

である青年の影響力はより一層盤石なものとなった。
多くの信者たちが目にしている現象があるという。
教祖様は懐に聖なる血をお納めになっておられる。
聖なる血が入った小瓶は中身が増えたり減ったりする。
ある男が教祖様にお会いした日に小瓶の聖血は満たされ、次の日から少しずつ減っていき、また男が現れて満ちるのだと。
男の正体を問うことは御法度である。
男の正体は教祖様が敬われている大変に偉い僧侶なのではないか。
噂が噂を呼ぶ中で、人々は尚もって青年を敬い畏れる。
年を経るほどに人々は青年を崇め奉った。
若いまま姿の変わらぬ神の子を。

彼が再びこの地に戻ってきたのは件の事件があった半年後、この時に男は遊びに行った遊郭である兄妹の命を救うことになるのだが、それはまた別の御話。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

「俺は戦働きなんぞは嫌で嫌で仕方ないが、どうにも人三倍は秀でて

いると自負してる。しかし！俺は嘘を吐けんのだ！吐いても誤魔化しきれないのだ。もし俺が一人でどうにかしようとしたら必ず拗れてしまう。」
目の前の男は自らの至らなさを心から詫びては歳の差を憚ることなく頭を下げてくる。
頭など下げなくてもよいのに。
「だから、童磨！不甲斐ない親父だと解っちゃいるが、俺に手を貸して欲しいっ！頼むッ!!」
答えは最初から決まっていた。
愛しい男は面をあげて青年を真正面から見つめながら頼みこむのだ。
男の真剣な眼が自分を貫く様に心中穏やかに居られぬ青年は誤魔化す様に目を閉じて微笑んで見せる。
「勿論だよ！父様のためなら俺は何だってできるさ！任せておくれ！何の不自由もさせないからさ！」
お願いしたいのはこちらの方だ。
俺は貴方が居なければ文字通り死んでしまうだろう。
「ありがとうっ！童磨、この恩は必ず近いうちに返しに来るから待っていてくれ！」
「うん！楽しみにしてるね！」
俺は貴方が共にいてくれなければ死んでしまう。
知って仕舞えば貴方以外の血を喉に通すことなど出来る筈もない。
貴方が施した総てをこの身の糧として俺は永遠のこうふくを捧げたい。
貴方が居る限りは俺は生きていたい。
極楽などありはしないが、貴方とならば地獄さえも喜んでお供したく。
青年は想う。
ーーーーーー
ーーーーー

―――
――
―

喜び勇んだ男は目一杯笑顔を振り撒いてから童磨の元を後にした。
思いの外日が落ちるのが早い。
寺院から出た男は逢瀬の淵に足を急がせた。

―――――
――――
―――
――
―

家族

家族

手を繋ぎませんか？
そう言いたかったのかもしれません。
彼は何も言わずにそっぽを向きながら冷たくなった私の手を片方ずつ握ると、自分の手から手袋を外して私の手に被せてくれました。
折角貸してくれた手袋は指先まで冷えていました。
彼は手袋で手を包んだ上から私の手を擦ったり、握りしめたりした暖かくしてくれようとしたんでしょうけどそれが全然暖かくならなくって。
でも、私は心持ちがとても温くて指先が冷えるのなんて気にせずに軍帽から覗く彼の真剣な表情を見つめていました。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

家を出るまでの不安は駅の前に佇むあの方の姿を目にしてからはすっかり消えていました。
あの後のことはよく覚えてないんです。
私はスッカリ安心して、機関車の中で彼と肩を寄せ合って眠ってしまったようです。
私の膝には毛布がかけてありました。
隣にはあの方が座っていらして、私の寝顔を眺めておられたのか私が目を覚ますと繕うように外方を向かれました。
私は可愛らしい方だなとつい思ってしまいました。

何だか不思議ですね、数えられるくらいしかお話をしたことも無かったのにもうすっかり心奪われている心地でした。
伊之助のことは私が抱いていたつもりでしたけれど、隣に座るあの方の腕の中にすっかり収まってスヤスヤと眠っておりました。
はっとして、あの子は何処にと心配もしたのですが、私が眠っている間に彼がかわりに大事にしてくれたようで安心しました。
その後はお互い何を言うこともなく、ずっと汽車に揺られておりました。
彼は帽子を脱いでいて、昼間胸につけていた煌びやかな勲章も外されておりました。
後々考えてみると胸に抱いてる伊之助の顔に当たるので外されたのかもしれません。
ただ、彼はずっと伊之助の寝顔をじーっと見守っておられましたよ。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

「此の子は可愛いね。」

汽車に揺られて1時間も経つ頃に彼がそう言ったんです。
私はついつい。
「えぇ。伊之助は可愛いんです。あったかいんですよ。」
と衆目も憚らずに大きな声で自信満々に言ってしまいました。
彼は目を丸くする素振りもなく「そうか。なら此の子は幸せだね。」と言われたんです。
彼はその後顔を私の方に向けて言いました。
「琴葉さんはどんな所に住みたいですか。」

「好みの食べ物は何ですか。」
破茶滅茶な方だなぁ、失礼ながらそう思いましたよ。
だっていきなりかけ離れた話をポンと出されたんですから。
でも私は気難しい方でも、威張り散らすような方でもないんだ、私の見る目は間違いなかったと安心しました。
私は彼に微笑んで「お洒落なお家には憧れますね。」だとか、「天ぷらが好きですよ。」と答えました。
私が答えると彼はパァッと顔を明るくして「それは良いですね。僕も天ぷらは大好きですよ。」と言ったり、「向こうに着いたらお洒落なお家を買いましょう。」なんて言われるんです。
とっても楽しくて不思議な気持ちでした。
私も彼もお互いに何度か会ったきりなのにこうして肩を寄せています。
なのに、肩を自然と寄せ合うような仲になったのに私と彼は初めてお見合いした時のようにお互い顔を赤くしたりしながら話しました。
汽車の中が暑い気がしますね、なんて差し障りのないようなお話をしながら駅に着くまで喋り放しでした。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

「それからは行冥さんもご存知の通りですよ。」
「あぁ。あの時は夜遅くに家が出来るまで泊めて欲しいなんて言われるものですから本当に驚きましたよ。」
「いや～すまん。あん時はどっちに行くか迷ったんだが、近場に在るのが君の寺だったもんでね。」
「あの時はお世話になりました。主人は思い切りが良いもので。」琴葉は俺の腕をとってそんなことを言う。

間違いじゃないから腹を立てる気なんてないけど…うーん。ぐうの音も出ないね。その通りだもの。
「いえいえ！とんでもない！有り難いばかりでしたよ。というより寧ろ申し訳ないくらいでした…もともと古い寺でしたから子供たちにも寒い思いをさせていた所を一緒に住むなら寺の子供達も家族だと仰って隙間風も通らないように建て直して頂いて…本当にありがとうございました!!」
「いい、いい！気にするな！俺は伊之助と琴葉がいたから壁を張り替えただけだって言っただろ？それに寺の増築だって、偶々誰かの財布に入ってた２００円がお前さんの枕元に落ちてたからそれを拾ったお前さんが正しく使っただけだ！そうだろ？」
俺はな～んにも知らん。たまたまヘソクリを丸々どっかに落としちまったくらいしか知らんぞー。
「し～。あなた、子供たちが起きてしまいますよ？」
俺はつい琴葉に言われて口を手で押さえた。
声を張ってしまったようだ…いけねぇ。
「…すまん。酔いが回ったみたいだ…。」
酒は飲んでないけどな。
…琴葉と初めて逢った時の話から始まって、今の生活になるまで長いようであっという間だったな。
俺は晩酌（甘酒）のお供にと行冥から聞かれた琴葉との馴れ初め話を俺、琴葉で交互に話して聞かせた。
正直恥ずかしいので所々省きながら話したのだが行冥は泣いている。今日はやけに泣くな…。
「…運殿…やはり貴方は大した御方だ。」
鼻を啜った行冥がそんなことを言い出した。
「いきなり煽てられても何も出ないぞ？ほらっ、甘酒でも飲め飲め。」
「うぅ…忝い。…美味しい。」
「ふふふ…甘酒が出ているじゃありませんか。」
琴葉は俺の洒落を理解できる数少ない人間だ。
俺は酒を飲まない。煙草も吸わない。別に大した理由もないが、子

供たちに酒臭いとか煙臭いと言われるのだけは我慢出来ないのだ。
あとは節約だな。
ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー

伊之助は運さんと一緒になってからすくすくと成長していきました。
今では風邪も中々ひかない健康な子に育ってくれているのは行冥さんの元でお世話になった時間が長かったからでしょう。
運さんはとにかく豪放磊落で、宿に泊まった晩も私があの子の為にお湯を頂いて来た時には彼が伊之助を抱きしめて眠りこけておりました。
肩を揺するとハッと目を覚まして伊之助の体を拭くのを手伝ってくれて、私が寝ようと横になると伊之助を自分と私の間に挟んで自然と眠っておりました。
次の日の朝に目が覚めた時はやはり彼が伊之助を抱きしめていて、伊之助もすやすやと眠っておりました。
私たちは駅に着いてからは運さんがとってくれた宿に一晩泊めてもらった翌朝から行冥さんのお寺がある山に登りました。
私はあまり山を登ったことも無かったのですが、朝からピチッと軍服に身を包んだ運さんはとても頼もしく見えて不安もそこまで大きくないままに山に入りました。
山の自然豊かな風景を伊之助は気に入ったようでした。
色んなところに手を伸ばしたり、目をキラキラさせていました。
それを見るたびに運さんは嬉しそうに落ち葉を拾ってきたりどんぐりを拾ってきたりして、私は朝のピシリとした格好良い彼の姿との差が可笑しくて笑って見ていました。
伊之助はどんぐりが特にお気に召したようで、気に入ってもらえた

彼も喜んでニコニコしてらっしゃいました。
そろそろお寺だというところで運さんが休憩を入れてくれました。
彼が用意してくれた握飯とたくあんとを3人で食べました。
あぁ…伊之助はまだお乳でしたね。
ふふふ…彼は私が「伊之助にもご飯をあげようね～」と言うと顔を真っ赤にして体を向こうに向けてました。
彼は耳まで赤くして体を向こうに向けておにぎりを食べつつ頬りに伊之助～いっぱい食べて大っきくなれよ～なんて上ずりながら声を掛けていました。
可愛い方だなぁ…なんてやはり想ってしまいました。

お昼を軽く済ませてからまた登り始めたのですが、途中で大きな猪に出会ったんです。
大きな猪はお母さんのようで、可愛らしいウリ坊を私たちから庇うように威嚇していました。
暫くして私たちが何もしないと分かると彼女たちは山に入って行きました。
伊之助もウリ坊みたいに可愛いねぇ～なんて声をかけてみたり。伊之助はどこか誇らしげで可愛らしかったです。
そのあとはもう寺まで目前という所で大事件が起きてしまいました。
伊之助のおしめを変えなければならなかったんです。
寺で替えせてもらおうかとも思いましたが、直ぐそばに丁度良い切り株がありましたから、そこで替えようと思ったんです。
運さんは直ぐ近くの川に洗濯に行ってくれると言うので、私は替えのおしめを風呂敷から取り出していたんです。
中々おしめが見つからず、やっと見つかってさぁとり替えようと思って振り返るとそこに伊之助がいなかったんです。
私はあっ！と声をあげてしまって、急いで周りを探しました。
けれど全然見つからないのです。
川から洗濯を終えて戻ってきた運さんに此のことを話すと、私の何

倍を驚かれて顔が真っ白になったかと思えば「伊之助ぇぇぇ!!!!」と絶叫されて、軍帽を振り落としたのも気にせず山に飛び込もうとする勢いでした。
どうにか諌めてどこを探しましょうか、とかお寺のお知り合いにご協力をお願いできないかとかを話し合いました。
しかし二人とも気が気じゃありませんから話すのもそこそこに暗くなってきたから一人は危ないと彼が言い二人で山に入りました。
三時間は過ぎたでしょうか。辺りは真っ暗で、一寸先の木の幹にも顔をぶつけてしまいそうでした。
それでも、偶々運さんが持参したランタンに助けられてなんとか探し続けていました。
今頃寒い思いをしているんじゃなかろうか。
何か獣に襲われてはいないか。
変な病気をもらってはいないか。
祟りや神隠しさえも脳裏をよぎりました。
ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー
あれから更に一時間が過ぎました。
私は半泣きになって探していましたが、立っていられなくなってしまいました。
ランタンを持って運さんが私を負ぶって懸命に探してくれていますが、私の心胆は凍えるようでした。
もうダメなのかと思ったそのときです。
ガサガサガサガサッッ!!
⁉?
「熊か⁉?」
運さんがそう声をあげると帰ってきたのは「だぁーぶぅー」

という赤ん坊の声でした。
「伊之助ぇっ！」
そう運さんが大声をあげると彼は私を負ぶったまま茂みまでの数メートル跳躍しました。
ガサガサっ！
「あぁ…よかった！」
そこにいたのは確かに伊之助でした。
顔や体はどろんこだらけでしたが大きな傷もなく本当に安心しました。でも誰がここまで連れてきてくれたんでしょう？…「伊之助は一人でここまでたどり着いたの？」と私が尋ねると…フゴッ!!という応えが帰ってきました。
「ええ⁉？」「フゴッ！フゴフゴ！」
私と運さんは二人して素っ頓狂な声をあげて今回の犯人もとい解決してくれた張本人を見ました。
昼間に見た母猪がそこにはおりました。
伊之助は母猪や他のウリ坊達から擦り寄られて体が冷え切らずに済んだのでしょう。
伊之助は器用に母猪の背中を攀じ登ると誇らしげにフン！と鼻息を荒くして見せてくれました。
可愛い可愛いウリ坊だこと、とほっこりしてしまいます。
一塊の茶色いモコモコを前にして驚きと不思議で笑いが込み上げてきて二人で笑いが漏れました。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーーー
ー

猪の家族と別れた後、やっとの思いで元来た道を辿りそこから石段を登って目的のお寺に着きました。

夜遅くだったのですが、何度も来たことがあるという運さんは勝手知ったる我が家とばかりに裏口を見つけるとそこから入って囲炉裏を囲んでいた行冥さんに「ごめん。泊まらしてくれない？」と声を掛けました。

行冥さんは誰がきたのかを裏口から入ってくるという癖からわかっていたようで、快く迎えてくれました。

それから約五年間を行冥さんのお寺で過ごしました。

お家自体は初めの年に見つかったのですが、運さんが伊之助と遊べるからという理由で山に囲まれた行冥さんのお寺を痛く気に入ってしまい二年三年とお世話になることになったのです。

運さんは朝が弱いので仕事がある時は前日に街の方に買った新しい家で一人で生活し、自分が帰って来るまでは必ず部下の軍人さんを寺に常駐させておくといった感じでした。

運さんに呼ばれる軍人さんは決まって地方から来た人が多く、貧しさも山遊びもよく知っていて寺の子供達にも優しい人が多かったので安心でした。

必ず一週間の半分は寺で過ごすということもあって、運さんはあっという間に古かったお寺を快適に改装してしまいました。

大工さんを呼ぶこともありましたし、金具屋さんを呼ぶこともありましたし、とにかくお金に色目をつけませんでした。

行冥さんも流石に冷や冷やしていたそうですが、それに気づいたあの人は自分のヘソクリを私にも隠してこっそり行冥さんの枕元に”落として”きたんです。

私は知っていましたから。次の日に行冥さんがうちの人と言い合う姿に笑いを堪えるので必死でした。

行冥さんは「貰えない!!」あの人は「落ちてたから俺のじゃない!!」って昼になるまで言い合ってました。

結局最後は「俺はこれから伊之助と山でご飯を食べなきゃならないから、君は俺のお遣いを頼まれてくれ。」とうちの人が言い、行冥さんが「しかし！お話はまだ！」と言い出すのを待たずに…

「あぁー・そーいえばー行冥はー目が見えないんだったーこりゃー悪い

ことを言ったー!!すまんなー!!けれどーお遣いはしてほしーしなー!あっ!子供達と一緒に行けば良いじゃないかー!!そーだ!そーだ!それがいい!ウム!……じゃあ俺はこれで。頼むぞ行ぅ冥!あっ、言い忘れがあったな。良い子にはお菓子を買ってやらんとな!!じゃっ!」

あの人はそういうと日向ぼっこしていた伊之助を抱いてさっさと山に行ってしまいました。

丸っきり嘘のつけない人ですから、演技したつもりでも酷い棒読みになっていて私の我慢も限界で噴き出してしまいました。

そのあとは想像に難くなく。

”お遣いに行く良い子にはお菓子を買ってやらんとなー!”という声がもう一度遠くに聞こえたかと思えば、ドタドタと寺の子供たちが集まってきて行冥に私がお遣いに行くのだと言い出しました。

行冥さんはどの子を特別扱いしたりすることのない公平な人ですから「わかった、わかった。…それじゃあ皆んなで行こうか。」と言って寺の子供たち皆んなを連れて街まで降りて行きました。

私はお夕飯の支度をしておきますよと言って、みんなの帰りを待ちました。

その日の夕食は賑やかでとても楽しかった。

なんだかんだと言っていた行冥さんも、日頃甘やかしてやれないからと子供たちの一人一人の欲しいものや食べたいものを強請られた端から買ってやると言った具合で、もういいと言われてもあの人に使い過ぎたと謝ったりしておりました。

あの人はいいって言ったら良いんだ!と怒鳴る割には楽しかったか?美味いもの食べてきたか~?と寺の子達に食べ終わっても寝るまで話しかけていました。

話しかけられた子達もその子達でとても楽しそうにやれ飴を買ってもらった、羊羹を食べた、流行りの歌を覚えたと楽しそうに語っていました。

夜も遅いし寝ようと大人たちが言っても中々寝付けないのか、笑い声が聞こえたりしました。

伊之助は今日もお父さんと野原を駆け回って遊んで疲れ切ったのか一人熟睡でした。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーーー
ーー
ー

三年が経つ頃には寺のみんなが家族といった様子でみんな益々仲良くなっていました。

伊之助はこの頃になると山野を一人で駆けては例の母猪のとこに行って大きくなったウリ坊と遊んだりしていたようです。

何を猪のお母さんにお話しするの？と聞くと山のことを教えてもらったり、お父さんとお母さんの話をするんだと言っていました。

山のこと…はよくわかりませんでしたが兎にも角にも楽しそうに笑う伊之助が見れて母さんは幸せです。ほわほわしてしまいます。

お寺に来てから二年目のある日にいつもの様に縁側からあの人、伊之助、私で川の字で寝るように布団を敷いていると、明日は仕事がないので帰ってきたあの人が茶褐色の軍服のままに私の所まですごい勢いで来たんです。

あの人が何かを思い付いた時によくある事でしたから、私も落ち着いて「御夕飯の支度はしてありますから、今お布団を先に敷いてしまっても宜しいかしら。」と聞いたんです。

そしたらあの人が「夕飯は勿論食べる！だけどそっちじゃ無いんだ！布団だよ布団！…えぇい！ここの襖が邪魔だぁ！」

捲し立てるようにそう言うと、あの人は襖を外し始めたんです。

だから私は「何かお仕事で気に触るようなことがあったんですか？」と、そう聞きましたの。

するとあの人は首をぶんぶん振って「あったとしても俺がお前に当たるわけがないだろう。…すまんな、一旦落ち着こう。」と言って深呼

吸を3回ほど繰り返しました。
3回目が終わる頃になって行冥さんがいらして、「おぉ。おかえりなさい。夕飯は天ぷらですよ。」と何時もの様に言うとあの人は「そうだなぁ。ご飯食べてからにしようかな。」といって着替え出したんです。
何も差し支えが無いんでしたら良いのですが、と思いつつ私は布団は後にして私も夕飯をいただくことにしました。
行冥さんのお寺での御夕飯は基本的に自分で食べる分を自分で盛る。お米を自由に粧って良いけど盛った分は残さない。
そういうルールをあの人がお寺でみんなと暮らし始めてから決めたんだそうです。
これは私もあの人も勿論適用される様で、あの人は一度も私に飯を粧えとか酒の酌をしろとかとは言いませんでした。
昔のことを思い出して、運さんのそんな所にじ～んとくる時は決まって彼に惚れなおす時でしょうね。
あの日から自然と、気づけば何も支えることなく穏やかで幸せな日々が続いていることは本当に有難いことです。
こうして口に運ぶ一匙一匙のお米にも楽を見出せてしまうのは、全てあの時の御誘いに乗ったからなのでしょうね。
口を動かすことも忘れていると、子供たちはおかわりに殺到していました。食べ盛りの内にひもじい思いをするのは本当に辛いことですから。
自分で盛りなさい、その言葉の意味もどちらかというと好きなだけ食べて良いんだよという思いの表れなのでしょう。
伊之助も食べ盛り…なのに伊之助は行っていないようでした。
野山で猪と戯れるような元気な子です。お腹は一番減っていてもおかしくありませんのに。
伊之助はいかないの？そう聞こうとすると、隣で黙々と食べていたあの人が箸を置いて声を張りました。
「んぁ゛っん！お前タァァチっ!!今日から皆んなで寝るぞぉぉぉぉ!!!」
行冥さんはキョトンとしていますが、すぐに気づいたのかまた涙を

流し始めました。本当に涙脆い方です。この時は別格に酷くて数珠まで合わせ始めたのには驚きました。
その場は一先ずは食べ終わってからと言う空気になりました。
お風呂も上がり皆んなを集めて貰うとあの人が言葉足らずだったなと謝り詳しく説明してくれました。
彼曰く、端っこを俺、真ん中を行冥、囲炉裏の近くに私が布団を敷いて寝ろと言うのです。
子供たちは3人の大人の間に日にち毎にそれぞれ挟まれて眠るということにしよう、と彼は締めくくりました。
伊之助は目をキラキラさせながら彼に抱きつきました。
他の子供達もピンと来ていない様子でしたが、行冥さんも皆んなで寝ようと言うので彼の言う通りに布団を敷きました。
案の定彼の言っていた通りに襖を外しました。
また、このことで後々に改築することになるのですが横の幅が足りないと言うことで、皆んな横になって寝るために一人くらいずつ大人の布団に入って寝ることになりました。
おやすみなさい。そう言って私はわからないまま床に入りました。
ーーーーーーー
ーーーーー
ーーー
ーー
ー

…次の日の朝になって、私はやっと彼の言いたかったことが分かりました。
次の日から伊之助はおかわりにも皆んなと一緒に行くし、山や猪とだけでなく寺の皆んなに混ざって遊ぶようになったのです。
……行冥さんのお話では、この寺の子達は孤児です。
…皆んな両親が居ない中で、一人だけ両親がいる。
…寝る時も皆んなは子供同士で、大人に囲まれずに寝ているが、自分は両親に見守られて寝ている。

私はこの寺のなかった全てが一つの家族のようだと感じていたけれども、寺の子供達にとって家族は行冥さんだけで、私たちは同居している違う家族でしかなかったのかも知れない。
彼は、あの人は私達と行冥さん達を本当の家族にしたかったんですね。…いままで、私は全く考えたこともありませんでした。
だから伊之助は気を遣っていたんだね。
伊之助は優しいね。
伊之助は繊細で優しい子なんだね。
「…お母さん、ちゃんと見てあげられてなかったんだね。」
「おかあさん？」
愛しい我が子の声に顔を上げました。
優しい夫と、優しい私の子が二人で私の顔を心配そうに覗き込みました。
どうやら口に出てしまっていたようです。
「伊之助。お母さんに抱っこしてもらおうな。」
肩車していた彼は頭を抱くようにしてしがみつく伊之助に語りかけました。
「う？うんっ。」
戸惑いながらも彼が肩から伊之助を下ろして私の胸に預けました。
「おかぁさん？いのしゅけ、あったかい？」
伊之助は喋れるようになりました。…もうこんなに大きくなったんだね。
「うん。っ伊之助はあったかいねぇ…うん、あったかいよ。」
私も行冥さんの泣き上戸がうつったみたい。涙が頬を伝って止まらないの。
「琴葉、伊之助のこと二人で一緒に沢山沢山見ていこうな。」
運さんは莞爾として笑うと私の腕の中の伊之助の頭を撫でつつそう言ってくれました。
ええ！…ずっと、ずっと一緒に見守りましょうね…あなた。

奏琴想詩

拝欲・崇慕・蝕愛

ある時、何かを感じたあの人がお仕事を放って私を寺まで迎えに来てくれた。
私を街に連れて行って、慣れない様子でお店を見て回ったり、着物や櫛、簪を私が見ていると
「どれが好きですか?」なんてまた初めて会った時みたいな敬語で聞かれて、
「これが好きです。」って私も彼の真似をしてかたい答え方をしてみたり、彼は
「なら買いましょう。是非買いましょう。」と言って私が好きだって言うものを私を置いてけぼりにしてそそくさと御会計に持っていくんです。
それが三軒も続いて私は買って下さるのは嬉しいけれど、それ以上に申し訳ないと伝えるんですけれど、彼は頑固で「で、デートというやつですから!」って言ってましたっけ。
その日は寺でお世話になって1年経とうとする時に買ったといっていたお家に泊まりました。
元々は家族で住むつもりで買ったのに山が楽しいってだけで彼が仕事に行く時にしか使ってなかったんです。
だから私がそこで寝泊まりしたのは初めてのことでした。
いつもとは違って自分達の家のはずなのに他所の家に泊まるみたいで変な感じでした。
でも、寺も良いけれどあの人の匂いや生活感を一杯に感じられるその家が、初めてきたのにとても好きになったのを覚えています。
夕食は外で洋食尽くしでした。
慣れていないと胃がもたれてしまいそうな豪勢な食事でした。
運さんってば店員さんの前だとキリリと瀟洒な男前になるのに、私

と二人だけになると途端にふにゃりと笑う優しげな雰囲気になるです。
彼はとても若々しいのに威厳があったり、見た目よりもうんと可愛らしくなったりするんです。けれど、そこも運さんの素敵な所なんです。
…夜は初めて二人きりでした。
灯りを消して、布団を二人で隣り合わせにして眠ります。
いつもは伊之助を二人で両脇から抱きしめて寝るので二人並ぶのも初めてでした。
私は眠ろう眠ろうとしても目が覚めてしまって眠れません。
きっと隣にいるこの人も一緒なんだ。そう思ってずっと胸に秘めていたことを言葉にしたんです。
「運さん。私はあなたと一緒になれて心の底から幸せです。けれど、だからこそ私はあなたに頂いてばかりなのが怖いです。」
外から聞こえる虫の声が嫌と言うほど大きく聞こえてきました。
鼓動は渾身を揺さ振るみたいに激しくて、私は胸を手で押さえました。
私は自分の布団をゆっくりと捲り、隣で向こうを向く彼の暗闇でもわかるほど赤く色づいた耳に口を寄せました。
一時一時を惜しむように口を耳元から離さないようにして、身体を布団に滑り込ませました。
手を彼の胸に這わせ、脚を彼の足に絡ませる。
一つの布団の中で二つの心臓の鼓動が、互いの赤み付いた肌を通してカラダの一番奥深くに響いた。
息遣いが五、十、十五と彼の鼓膜を震わせ、静かだった彼の息遣いが私の鼓膜を震わせる程に節操を無くした頃になってやっと、私は言葉を紡ぎました。
「あなたも私に何かを…いいえ…私を、求めてくれませんか？」

私は渇いてはりつく喉を如何にか震わせて彼の耳に想いを注ぎました。
彼は喉を鳴らすと私の方に振り向きました。

ーーーーーー
ーーーーー
ーーー
ーー
ー

その夜に、やっと私はあの人のモノになれたんです。
伊之助も、やっとあの人の子になれたんです。
私は…私は本当に幸せ。
伊之助の本当のお父さんも最初からアナタだったんです。
そして私の最初で最後の心から愛する主人もアナタだけ…。
…あの夜、最後に交わした言葉は、彼の「もう貰ってる…。俺は…とっくの昔に貴女と伊之助をもう貰ってるんだ。」という言葉でした。
そうですよ…私と伊之助はアナタに貰って頂いたんです。
アナタは翌朝、狸寝入りする私の耳元で静かに「お慕いしています」と、そう言ってくれました…
私もっ、私もお慕い申し上げておりますよ…アナタ。
私はアナタのものですよ…私はアナタのありのままを受け入れます。可愛らしいところも、子供好きなところも…全てが慕わしい。
たとえアナタの芳しさに惹かれる存在が私の他に在ろうとも…私の心は糸を通す程に弛むこともありません。
私はアナタへの碧血丹心を誓います。
何故なら、あの日あの時から…アナタは常に正しいということを私は、私だけは知っております。
…ねぇ、アナタ？私がアナタのためにできることは何でしょうか？
私はアナタに何か一つでも捧げられているのかしら…。